

平成29年(西暦2017年)02月

瞑想録(その18)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみにこれは科学でも学問でもありません。強いて分類すれば随筆です。科学が万能だとも思っていませんし、科学でない最大のポイントはここのあまたの思い付きについて証明を一切していないことです。私は、世の中には実は現状よりもずっと面白くて自由な物があるはずで、現代人はまだ十分にその視野を広げていないと信じています。

なお内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。またこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

さらにこの一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2017. 01. 05

1、表現手段としての言葉

芸術や事実伝達のために現在の人類に許されている表現手段としては、絵画、音楽、味覚、匂い、漫画、動画、アニメ、文章、擬態等がある。これらの媒体はいずれも一長一短なのだが、その理由は心象そのものをダイレクトかつ陽に表現できるという万能手段、例えば脳波伝播による直接感受のような技術を現代人が持ち合わせていないためである。

そしてこれまでの議論で、中でもトータル的に一番優れた伝達媒体は絵画もしくは手間をいとわなければアニメだと結論付けてきた。その理由は例えば「大爆発的に驚いて言葉も出なかった」と言うような状態は言葉で書いてもおよそその感情が伝わらず、飛び散るような絵画にしてくれた方がよっぽど伝心出来るというところだった。併せて絵画は物理法則から最も自由なので、ありえない状態も描けることも利点とした。

瞑想録(その18)

だがそう結論した私が結論した後も、依然としてこうして文章で自己表現しているという矛盾がある。そもそもネタを思いついたところで残すメモからして私の場合は片言の言葉なのだ。もちろん私が極めて不器用で画才がないというのも理由の一つであろう。だが多くの人が例えば最終作品は絵画であってもその初期イメージはおそらく、ちょっとした言葉で備忘としているのではないか。

ではなぜ言葉が、冒頭に挙げた不器用さにもかかわらず根強い「人気」を有するのか。もし表現したいことが論理であるならば、これは言葉か式によるしかないだろう。動画ならともかく絵画で論理は描けない。だがこれまでの議論で人の心象形成や決断の大部分は、論理でなく経験の集約に基づいていることが分かったはずだ。経験は論理とは違う。

だから結局今日の問題としては、「人の判断の基になる経験の集約を表現するのにどの媒体が一番マシか」と言う問いに還元される。そしてこの経験の集約にも言葉や文章が一番適しているのだ。その理由は経験の集約、例えば「臭うものを食べたら腹を壊した」と言った経験及び経験則もそのほとんどが経時的あるいは少なくとも順序的であるという点だ。経時や順序を絵画で表現するのは困難で、ここはやはり文章に頼ることになる。動画でも可能だが、この場合も結局その動画の主としてセリフの部分が生きているのだ。そして世の中の表現したい事象の多くが、実は順序部分を持っているということだ。

だから事物の順序が関与している局面では、あえてその非具体性と言う欠点に目をつぶってでも言葉や文章に依ることになる。しかも言葉や文章は非具体的な分だけより複雑に絡み合った心象や経験をたやすく表現できるという特徴も有して、これもメモや高度な成り行きの表現としては突出して優れた媒体ということになる。小説は心のひだや影を最も深く、非具体性の欠点がある意味覆って余りあるほど描くことができる。

その一例にもなるが例えば「このパンはまずい」と言うときに、この人は今食べているパンをそれまでのパンから得た平均値あるいは相場観を物差しとして「このパン」を判断している。ここでこのパン及び平均的なパンはいずれも脳内のアナログ空間上で位置を持つのであるが、いわばその差ベクトルを取っている形となる。ここで元の心象は「パン」であり感想としての差ベクトルは「まずい」であるのだが、パンとまずいは単独では何の関連もない。そのような連想のない心象がどうやって生起されるのであろうか。

瞑想録(その18)

思うにそれはその差ベクトルがいわば演算子(エージェント)として平行移動できて、感想として味の「良い悪い」を問われているという状況理解に基づいてそういった分野のアナログ集合の方に平行移動していき、その行った先で最も近い陽な言葉として「まずい」が選ばれたのである。もちろん陰的な心象に陽的離散的なぴったり合う言葉などあるわけがないから、近似の度合いを上げようとするれば「砂糖が多すぎでまずい」と言ったように形容句を重ねて近づけることができる。但し永遠に至らない。

さらに言葉には微妙なニュアンスを使い分ける能力もある程度ある。「その機械はクレーンと言うよりユンボだろう」と言うときの「と言うより」のように「似てはいるので参考になるが」と言う感じを出せる。あるいは「かわいい」と言う形容詞は褒めていると同時に属性の限定作用もあって、「天皇はかわいい」などと言うとちょっと異質に響いたりする。

次の例は言葉そのものと言うよりも心象の深さの問題だ。ある人が「昨日シューシャインホテルに泊まりました」と言った。その意味を理解したうえで返す答えとして、①「何か変だけど」、②「シューシャインって靴磨きのことでしょう」、③「あなたが泊まったホテルはサンシャインじゃないの」などといく様もの答え方がる。そしてこの例では後の答えほど具体的になっている。こういう具体的な場面に絵画は弱い。

今までに絵画あるいは画像の分野で最も単純なありようとして文様を例にして、特にその繰り返しパターンからその数学性と芸術性の関連を見たりした。しかし言葉や文学においては、通常的情景が同様に繰り返すと言うことはおよそあり得ない。だから少なくともデジタル数学とは背反になるかもしれないが、繰り返しのない心象のアナログ的態様は別途検討する必要がある。そしてそこでの四則演算に代わるキーワードは「演算子」であろう。

2、イエスの方舟

イエスの方舟事件はもう35年も前に、若い女性約20名が得体のしれないおっさんと姿をくらまして、人さらいとか洗脳とかハーレムとか言われて社会問題化した事件である。そして解明されたその実態は、家族の強制から逃れるのに必死の女性たちを千石剛賢なるキリスト者が身を挺して救済を差し伸べた事件であった。

タイミング的には集団自殺した人民寺院事件や集団結婚式の統一教会や連合赤軍の集団虐殺の後で、キリスト教系セックス教団の「愛の家族」と同じころである。

瞑想録(その18)

このため方舟事件には最初から疑惑がつきやすいタイミングにあった。また、オウム真理教のサリン事件より前であったために、オウム真理教については当初から疑いがあった割に踏み込みには慎重にならざるを得ない状況をもたらした。

女性たちの出家の原因はほぼ共通して親の価値観の強制、特に世間体的に良い子でいてエリート妻となることを強制されたことへの反発、人間誰でもが持つ基本的人権である「選択の自由」への強い希求であった。一般に親からの精神的暴力にあった時に子のとる方向には大きく3つの真逆のパターンがある。第一はあきらめて見かけ上従順になるが、実は人生すべてに捨て鉢で投げやりになることだ。そして第二は引きこもりと暴力。

第三は親不孝と言われながらも親から逃亡し、縁も連絡も切って独り立ちすることだ。そして方舟に逃げてきた娘たちは皆この道を選んだわけだが、このよりいばらの開拓する道で千石と言う聖書を基盤にした人生の達人の助言と庇護があったことは大きい。

ところでこの娘たちが方舟を知るに至ったのは多分に偶然である。と言うことは偶然が違えば彼女らは、人民寺院や統一教会やオウム真理教に入会してそのまま洗脳の奴隷になったのであろうか。もしそうならば方舟とその他のカルトの違いは紙一重と言うことになる。

この点について私が思うに彼女らはまず行き先を間違えなかつたろうし、仮に間違えたとしてもすぐにカルトの不自然さに気づいて脱会したことだろう。第一にカルトは「良いものを与える」が宣伝文句である。人民寺院なら千年王国、連合赤軍ならば革命の達成、オウムならば安直の解脱技術である。

だが彼女らは親の支配から逃げたかったわけであって、特に何か欲しかったわけではない。そして千石の方も、「おいしいことがありますよ」とは一言も言っていない。そもそも自由の制限に疲れて逃げてきた人々であるから、口先だけで内実のない「自由」などすぐに見破れたであろう。

それではほとんどの宗教がカルトになるところ、どうして方舟だけ例外的にカルトにならなかったのか。こちらの方が例外である。カルトには一定の法則があつて、旧来の歴史ある宗教の経典と教理を用いながらも巧妙に教祖が開祖の位置に居座り、それに自分本位の理屈をつけることで成立していく。だからどちらかと言うと、肌感覚が欠如していてイデオロギーや理屈に弱い人がはまりやすい。

瞑想録(その18)

他方で千石の場合は、宗教を利用して何か利得を得ようという下心はなかった。離婚や破産や夜逃げを繰り返した人生の中で人の深みを知った上で彼は聖書と出会い、多分に自己流ではあったが聖書と真摯に格闘した。この、既成のキリスト教教育を受けていなかった点が決定的に重要である。素心で聖書特にイエスの生涯を学び、組織神学の害毒に殺されていない神のイエス像を感得し、それを実践したわけである。若い女性たちの受け入れもその結実であった。

千石の集団運営は基本的に、聖書の原始共産制を見本にしている。メンバーの親や周囲との関係や程度は個人ごとに異なっていたのだが、そこに特に規律や統制を掛けなくても求心力を失わずに全員一緒に行動できた柔軟さがあった。この点はまさに聖書の見事な現実化であり、現代の宗教の限界に一石を投じるものである。

集団はしばしば連合赤軍のように、つまらないきっかけでいじめが始まる。これは田舎の因習社会等世の中一般に見えることだが、千石は変に規則や教理で異端審問せずにできる限り自由とした。ここには「規範はイエスさま」と言う原則に加えて、千石の肩ひじを張らない良い意味でいい加減だった性格が貢献していると見える。真の救いと悟りは個人の自由が保障されれば自発的に至れることを、千石は経験と聖書で知っていたのである。

この「基本は自分でなくイエス」、これが同時にこの集団がセックス教団化しなかった奇跡の理由でもある。世のカルトを見回すとこれも明らかに例外的だ。ちなみにイエスは決して女嫌いではない。だからこういう例外が、キリスト教に女嫌いを注入する使徒パウロ以前の「本来のイエス」を根拠に起きたということは、大きな意味がある。セックスマニアも不自然だが、パウロ的なセックス嫌悪も自由の敵で不自然なのだ。

さて千石の集団が社会問題化した時に、彼らは逃亡と言う対策で応じた。集団逃亡と言う対応策は最良だったとは言い難いが、まあ仕方なかったと言える。仮に世間にカミングアウトして自己主張をしても、世間の常識に基づいた無言の強制に基づく反論は耐えられないほどはるかに強くなる。しかもその事実誰よりも千石が受け入れたその逃げてきた女性たち、親家族に支配された女性たちが嫌と言うほど肌身で知っていたことなのだ。

では逃避したとしてその先に見通しはあるのか、単にどんどん追い詰められていくだけではないか。だがこの問いには、それを問う人の非信仰の人としての限界が露呈し

瞑想録(その18)

ている。信仰に立つならば必ず何かが変わり何かが開けてくる、方舟の一団はそう信じていたのだ。これは本当の信仰に特徴的である。

さらに問うならば、千石の一団は追い詰められたときになぜ人民寺院のような死を選ばなかったのか。これも千石の経験の深さと楽天性が大きい。更問として、追い詰められたとき彼らはなぜ連合赤軍のような内ゲバの壊滅状態に至らなかったのか。これは会員女性たちがほぼ救いの完成の時点にあって、自愛を通して他愛を実践できるレベルに至っていたためであろう。

最後になぜ千石はオウムのように、世界の制服や国家転覆と言った反社会的行動を起こさなかったのか。これはもう千石と麻原の人間性の違いと言うしかないであろう。つまりカルトと救いの信仰はそれほどに紙一重なのだ。イエスの魂が現代によみがえって受肉化するには原始の福音に帰るのではまだ不十分で、原初のイエスに帰らなければならない。だが原初に帰れば誰でもできるということではなく、そこには天性の性格の向き不向きがある。

つまり究極的には、本質におけるイエスとその人間との相同性も要件となるということである。これは神学大を出たか否かとか、そう言うこととは全く無関係である。

3、反復

これまでに何回か、特に文様を例にとって繰り返しの在り方を見てきた。繰り返しは数理科学の将来の発展の余地であるばかりでなく、あくまでも一分野に過ぎないものの芸術における様式美を形成している。

文様も多分にそうであったが特に結晶学になると、分子間距離等に制限があるために「一定の回転対称を持つ基本単位の並進」と言う形を取らざるを得なかった。デジタル科学ならばそれで終わりで良いのだが、ここは反復という言葉でもっとアナログ的な懐の深い繰り返しの態様を見たい。

第1の例は日本の城である(下図)。第一層を縮小させながら数層(例の場合は3層)が積み重なっている。ある意味鏡を2枚平行に並べてその中に顔を突っ込んだ時の、無限対称列の素朴な形である。この例では基本単位の第一層は4回対称だが形状は単純でなく、繰り返しも細部においては省略もあるのだが、我々も十分に認識できるようにこれは反復である。

瞑想録(その18)



次の例は鉄塔を下から見通した写真である(下図)。基本的に正六角形が縮小しつつ連なっている。もちろん個々の正六角形は梁とか梯子とか微妙に違うのであるが、そういうわずかな揺らぎが気にならないほどに我々はこの図に繰り返しを見出すことができる。つまり反復である。

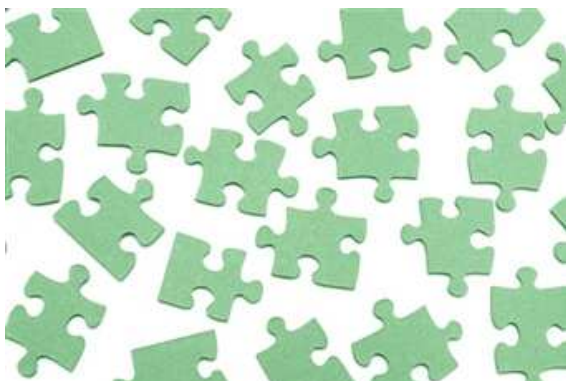


瞑想録(その18)

3番目の反復はつり橋の例である(下図)。この図においてつり橋は写真の一部にすぎずしかも微妙に捻じれているのだが、一部だろうが捻じれていようが我々がこの絵に繰り返しを認めることができる。しかもそれがこの写真のモチーフになっている。すなわち反復である。



4番目の例はジグソーパズルのピースである(下図)。ここのピースの凸凹の位置はよく見ると異なっている。また基本的な四角の部分は画面に均等に撒かれてはいるものの、全くの並進ではない。でも我々はこの絵から繰り返しを抽出することができるのであり、すなわち反復である。もしピースがすべて同形かつ同方向で等間隔だったら反復性はもっと高くなり、逆にピースの色がばらばらとかグラデーションとかだと反復度は下がるのであるが、そのいずれにしても依然として反復である。



瞑想録(その18)

5番目の例は日本庭園である(下図)。枯山水であって数個の石の周りを砂が、石の近くは円状にそれ以外のところでは平行線に搔かれている。ここで石のありかに幾何的な繰り返しはないものの、全体として統一された配置になっている。また砂模様も円は無限対称で、平行線は2回対称である。結晶学的には全体で厳密にとるために高々全体として2回対称としか言えないのだが、ここでの反復は現実にはもっとレベルが高い。



6番目の例は畝である(下図)。写真は透視図法になっているので絵画上の各畝は平行ではないが、現物は平行であることは容易に推察できる。さてここで各畝の細かい枝具合は全部違うはずであるが、マクロとしての畝は相同と見てよい。その意味でこの図も反復である。よくある唐草の乱れ繰り返しも、同様にマクロの反復である。

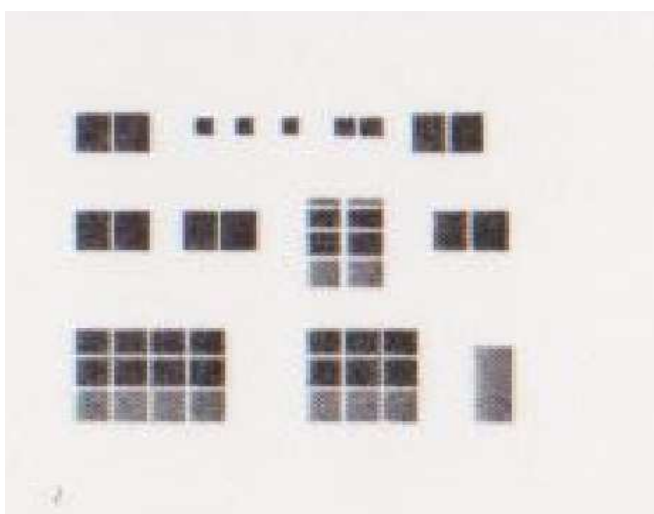


瞑想録(その18)

7番目の例は中国かインカの神殿であろうか(下図)。全体を占めるのは円対称の至聖所である。そしてその円対称は崩すものの、前面にやはり対称な出入り口と言うか橋がついている。これも一見して対称性の高いものであり、円対称と長方形の結合した総合的な反復と捉えられる。

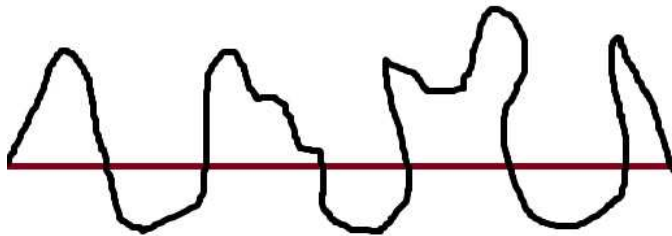


8番目の例は蒲田糺谷にある「ギャラリー南製作所」のロゴである(下図)。このロゴのモチーフは、碁盤様のマトリックス四角形から引き算で塗りつぶして敢えて余白を作って切り離したものである。四角形は元の町工場を、塗りつぶしは現在のアートギャラリーを象徴しているのであろう。これも反復であると同時にアートでもある。



瞑想録(その18)

最後の例は私がフリーハンドで描いた波である(下図)。波と言うと一般にはもっと規則的な正弦波を言うのであるが、以前から主張しているように正弦波は周期、振幅、位相の3つのデジタル数字で決まってしまう、いわばデジタル波である。では本当のアナログ波はどうかと言うと、この図のように上下動の反復はしているが形状は毎回違っているようなものだ。この本来の波の非定型反復と言う例は、ファジー集合が「ファジーの程度は決定的である」という意味で不徹底なアナログであるという、やはり以前の私の主張にも通じる。



本日はアナログ的な反復がいかに柔軟かを見た。この柔らかさがデジタル数字の偏狭さを超えて、芸術的美や新規要素の発現を可能にするのだ。

4、エホバ輸血拒否事件

先日放送ライブラリーにビートたけし主演の「イエスの方舟」を見に行った際に、併せてやはりたけし主演の「エホバ輸血拒否事件」も見てきた。事実に基づいたフィクション構成で、内容はダンプに轢かれて輸血手術が必要な子供をエホバ信者の親が拒絶し続けた結果、助かるはずの子が死んでしまったという事件である。

エホバは異端系のキリスト教で、その教理の特徴は輸血をかたくなに拒否することである。信徒は世界中に約100万人と言う。なぜ輸血を拒否するのかその理由は一応聖書の文句に根拠を置いているが、多分にこじつけである。しかもこの団体は150年ほど前に出来たばかりだから、その発端は「当時の幹部に神からの啓示があった」とかその程度だろう。

我々一般人からすると、「狂っている」とか「主客が逆転している」と見える。だが彼らにしてみると、①この世は仮の世で来世での復活こそが本物だ、②もし輸血をすると

瞑想録(その18)

破門になるばかりでなく来世の復活もそこでの親や友人との再会もなくなる、と信じている。だからこの世で死ぬことは、来世の幸福に比べれば取るに足らないことなのだ。だから親が輸血を承諾することは、まさに息子の将来を奪う愛のない越権行為に当たると。

エホバでない者から見ると依然として狂っているように思えるが、①の「今生は仮で来世は天国」という発想は実はほとんどの宗教にある。宗教の発端はこの世の不平等や不合理にあって、「その不平等は来世で報われる」、これは多くの宗教に共通した答えである。

キリスト教等の一神教はもちろん、仏教等の多神教でもそうである。そして来世を見た者など誰もいないのに、証拠なしにこれを信じるから信仰である。それも始まりは「今が駄目でも来世があるさ」程度だったのに、宗教的熱心から「来世こそが本物で現世は幻だ」と極端側に変質し、いわばポジとネガが入れ替わる。

この夫婦がなぜこの教義を信じるに至ったか、その経緯は色々あったようだ。会社でノルマに終われ追いつめられる日々、誘われて出てみたところ良い人ばかりだったエホバの家庭集会、究極的な平和と和解を目指すというその教義等である。あるいは最初は輸血禁止を不思議に思ったのかもしれないが、総体として彼らは救われた気がしたのであろう。

そしておよそ宗教と言うもの、いったん入信して一定期間信徒をやってしまうと、それぞれが信徒になったきっかけは色々異なっているはいようが、もはやきっかけなどどうでも良くなって、「その教義を固く信じる自分が居る」という気持ちになっていく。だから医師たちがいくら世間の常識で合理的に説得しようとも、常識が違うのだから受け入れるはずがない。

この辺のプロセスはうつ病や精神分裂等の精神病と似たところがある。知り合いの精神科医に聞いたことだが、精神疾患に陥った患者について、①その病気に陥った理由は大抵の場合特定できない、②仮に特手できたとしてもその原因を取り除けば治るということでもない、ということだ。もう理由なく信じてしまい、頭はあちらの世界に行ってしまうているのだ。

ところでこうやってここまでエホバの輸血死を論じてきたのは、エホバの恐ろしさを煽るためではない。私は日本古来のアニミズム信仰で、神社に参拝にも行くし皇室も尊

瞑想録(その18)

敬している。但し先のエホバの子と違って親の刷り込みはなくて、自分の人生を通じて自ら感得したものである。

神社や皇室と言えば大和魂や武士道だ。私は大和魂の潔さに身が引き締まり打ち震える。そしてその大和魂には「武士の本懐は死だ」あるいは「生きるとこは死ぬことと見つけた」と言った、生に執着しない潔さも含まれている。いわば男子の本懐だ。そしてこの本懐で70年前に多くの若者が特攻隊として喜んで散華して、今は靖国神社のご祭神になっている。そして私たちは彼らを尊敬している。

さてここで大和魂の私とエホバの信者と、どこが違うのだろうか。どちらも自らの確信をもって、「1日でも美味しいものを食って長生きしたい」と言った常識とは違うところを生きている。先の戦争時も米軍は日本民間人に「命を大切にしろ」と呼びかけたが、「生きて辱めを受けず」として集団自殺するほどだった。

さらに加えてエホバも大和魂も自発的に信じているだけなのだ。つまり自分が死んで生きるだけで、オウム真理教のように他人を巻き添えにはしていない。違いと言えばエホバの場合は被害者が少年であって、刷り込みはあったらということだ。そしてその後決定した医療指針では未成年については親の承諾がなくても輸血できると決まったが、これは本日の議論では主題ではない。

本日の議論の核心、それは「もしエホバが狂っているというのなら大和魂だって同様に狂っている」と言う反論に、少なくとも論理レベルでは再反論できない自分のもどかしさである。「青い鳥が青いのは青い実を食べたからだ」、こういう童謡があって今は子供でも冗談としか思わないが、昔の人は素朴に信じていたことだろう。仏教には即身仏と言う一種の自殺があったが、人々はありがたがっていた。イスラムでは殉教者は尊敬される。どこまではカルトでどこからがカルトでないのか。

おそらく論理レベルではエホバに対して反論のしようはないだろう。だから医師団も警察も無力だったのだ。問題の核心は感情レベルにある。我々が大和魂よりもエホバの方が狂っていると感じるのは、現状を見ずに梃子でも絶対に教理と言うイデオロギーと論理を変えないその非人間的な岩窟さであり、普段の実生活から自然に感得される肌感覚のなさだ。

要約すれば一神教が得意の「不変が絶対善」と決めつけるその尊大さが、平均的日本人には強烈な違和感となるということだ。この辺は70年代学生運動の集団狂気や連合赤軍によるリンチ殺人と通じるところがある。

5、初期混乱期

現在の世界は民主主義でほぼ整備されている。もちろん共産主義の国もあれば100年ほど前までは王制も多かったが、いずれにしてもほぼ秩序だった。だが世界4大文明よりもっと前の人および人の集団はあるがその集団の規範はまだまちまちであったころ、このような「秩序以前の状態」はどんな世界にもあって、これをここでは初期混乱期と呼ぶことにする。

本日の話題は、バラバラの個別がどうやって初期混乱期と言う過渡期を経て秩序に至るかである。このことを話題にするのは初期混乱期の方が現状のような固まった秩序期よりも、時代が遷移の途中にあって種々の「励起状態」が起きうるからだ。つまり私のような放浪者でありディレッタントで奇瑞を愛でる者にはよほど面白い、やりがいのあるアナログな時代だからである。

こういう時代を求めるのに、歴史の向こうに消えてしまった遙か古代に戻る必要は必ずしもない。近代でもアメリカ西部とか戦前の満州とか、そのような「擬無法地帯」は存在していたのである。文献も相応に残っていて、無法者たちがどのように策謀し離散集合しつつ最後は統合されて秩序の中に消滅していくかの過程をかなり細かく教えてくれる。

例として満州を取ろう。通史としては「馬賊で見る満州」を用いた。これは張作霖を主人公に貧農から匪賊、馬賊を経て軍閥になり最後は爆殺される明治末期から昭和3年までを通して論じた本である。そしてこの本を縦糸とすると横糸に当たる、「石光真清の手記」と言う実体験の旅行記が残されている。時代は義和団の乱から日露戦争前の明治30年代前半である。

満州は当時清朝末期にあり、清朝の祖先の女真族の出身地でもあった。ただ当時は中国王朝に多分に恒常的な、「領地が広大で治めきれず宦官や役人や軍人が腐敗していて私財を肥やすだけ」の無法地域でもあった。民衆にとって公的な統治機構は、収税と称して略奪する敵ではあっても保護は全く期待できない、エントロピーが崩壊したような状況になっていた。また満州の土地柄が寒冷な上に痩せていて、生計にはおよそ不便なところでもあった。

そこで人民は自らの財産保護のために、金で馬賊や匪賊を雇って自営することとなる。また貧農も馬賊や匪賊の手下になったほうが安定した生活ができるということで容易

瞑想録(その18)

に転向を繰り返し、市民と馬賊の線引きも余りなかった。馬賊や匪賊はちょうど日本のやくざや新撰組のようで、義によって結ばれているが金次第でどちらの味方にもなり、かつ互いに縄張り抗争を繰り返していた。

加えてこの時代、満州はロシアの南下政策にさらされていた。ロシアは着々と鉄道を敷いて満州を事実上私物化するのに対し、清朝は何の対策も打てなかった。そして日本も対抗政策上ロシア肥大化を阻止すべく、満州に密偵や兵を送り込んでいた。石光は軍に属しながら商人に身分を隠して、満州を偵察して回った人物である。彼の報告によると馬賊も頭目ともなると人物もひとかどで、数百人もの部下を従えていたという。

ただ一般的に馬賊はやくざや用心棒あるいはせいぜい土豪程度で、成り行き次第でロシアの手先にも日本の手先にもなった。そしてそれも簡単に寝返る等であくまでも暴力専門であり、政治的民生的に発展することはなかった。この限界を超えられたのが張作霖である。張はちょうど日本の田中角栄や太閤秀吉のように頭は良いが教育に恵まれなかっただけであって、時代を先読みする能力があり民生や財政もこなして馬賊から軍閥に「進級」できた。

一般に張作霖と言うと日本でも中国でも日本の関東軍の傀儡と思われがちだが、実際は軍閥として李鴻章や袁世凱に負けないほどの野心を有していた。彼にしてみれば日本は、味方と思わせて取れるだけの資金と武器を調達する先に過ぎなかった。もっと調子よく彼の思惑通りに事がなったら、彼は日本、ロシア及び国民政府を出し抜いて中国を統一したかもしれない。

彼にとって運が良かったことに、対抗勢力になりそうだった李鴻章も袁世凱も張が軍閥として十分に成長したタイミングには既に亡くなっている。だがこれは同時に運が悪かったのもあって、彼の対抗相手は満州からいきなり中国全土を抑えた蒋介石となっていて、およそ勝ち目はなかった。加えて張が日本だけでは不十分として欧州と結ぼうとし、用済みとなり爆殺されたのである。

こと張に関してはそのような興亡人生であったが、石光真清が明治後期の日露戦争直前に自ら体験した満州、これがまた面白い。当時番外地のようであった満州で日本人と言えば、ほとんどが脛に傷ある者か女郎であった。義和団の乱が飛び火してアムール川沿いの都市ブラゴビシチェンスクでロシア軍が蜂起を図り、何百人もの中国人を惨殺し官警は人民を守るところか我先にと逃亡するところにも出くわしている。

瞑想録(その18)

その後石光は満州一帯、特に当時まだ開発初期だったハルピンやウラジオストックあるいは奉天大連と言った未開の土地を偵察して歩く。自らは写真屋を開業して賄賂でロシア軍御用達として取り入って、ロシアの軍事機密や鉄道事情を日本に送り続ける。身分が割れそうになるとすかさず逃亡して、幾度も追い詰められながらも日露戦争開戦を目前にしてようやく脱出した。あたかもルパン3世やプロスパイみたいなことを地でやってきたのであり、その生死を掛けた活躍と当時の満州の混沌は胸に迫るものがある。

ちなみに石光が満州で偵察をしていたのと時を同じくして、僧侶の川口慧海がチベットに密入国してこちらの国情を日本にもたらしている。そしてここチベットでもロシアが、政府の中枢にまで入り込んでいた。こちらはこちらで生死の分かれ目や策謀や離別を多く体験して日本人であることがばれそうになると急きょ脱出するという、こちらも負けず劣らず波乱万丈であった。自ら常に時代を先読みして最善策を練り出さないと、一瞬の油断が死に至るのである。

さて、張以降の馬賊はと言うと、結局は日本軍とロシア軍に、その後は国民政府と八路軍に統合されて現在に至り、発展的に秩序の中に組み込まれて消滅したようである。そしてこの約半世紀の馬賊の発生から消滅に至る過程、これはイエスや仏陀が布教を始めてから教団に至る過程とかなり類似して見える。さらに言えば宇宙がビッグバンののちにクオークが飛び交うだけで時間も空間もなかった時点から、断熱膨張で時空や物質が結晶化していき多結晶を経て単一結晶と言う我々の宇宙が形成されるまでとも並行である。

イエスも千石もそうだったようにまだ原始集団の数十人で布教開始数年以内の小さくておよそ話題にも名誉にもならなかった時代、この短くて原理的に永続できない過渡的な時代が私のような放浪者には一番アナログでスリリングなのだ。

6、リーマンショック

私は経済学、特に実体経済や経済政策には不案内です。今日のこの文章は、自分の勉強と備忘の為に作りました。主な教科書は「リーマンショック—5年目の真実」(日本経済新聞社、2014年)です。

リーマンショックは住宅金融のサブプライム問題をきっかけにして起こった。サブプライムとは「並以下」という意味で、従来正規に住宅資金を借りられるほどの資産がない層を相手に、より高い金利で住宅ローンを組む金融制度である。

瞑想録(その18)

与信も担保もない者にはより高い金利でローンを組むのは当然だ。だがここでローンを供与する側は、債権の債券化(ばら売り)と言う手段で実質的にローンリスクを分散して販売した。証券化は確かにリスクを分散してはくれるが、他方で1社のリスクが国内はもとより国境を越えて世界中に波及する「巻き込み効果」の側面も有した。

そのリーマンブラザーズが、当初予想以上の回収不能によって資金がショートして潰れる羽目になる。その噂は倒産の数日前から広がって大幅な金融市場の収縮を招き、これが事態を悪循環させてリーマンブラザーズは本当に破産する。ところが当時の米国政府は「民は民」の立場を堅持して、救済介入はあえてしなかった。

ところが信用収縮は異常に大きくて、他の金融関連業界つまり銀行、証券、保険、不動産、さらには一般製造業の資金調達にまで波及する勢いを見せた。当初の金融権威筋の予想よりも、金融商品の発達により相互依存が強すぎて、もはや1企業の倒産では話が済まなくなってきたからである。

先ずバンクオブアメリカ(バンカメ)がメリルリンチを救済合併する。すると次に危ないのはAIG(American Insurance Group)であった。この会社の特徴は膨大なデリバティブやCDS(credit default swap)と言った、いわば「保険の保険」を大量に抱えていたことで、ここが倒産すればその影響は他社の比でない。米国の金融システムそのものが壊滅する恐れすらあった。

そこで米国政府は「民は民で」の原則を破って、国の介入によってAIGを救済した。またモルガンスタンレーは例外的に、日本の三菱UFJ等から資金注入を受けられて一息ついた。GMとクライスラーは一時国家管理になった。ゴールドマンサックスは投資銀行でもあり、かろうじて踏みとどまった。

国による金融業者の救済は、「国自体の倒産よりはずっとましだ」という論理と現実によってなされた。だが国による救済とはすなわち税金による救済あるいは国民一人一人からの強制取り上げによる救済であり、ここに不平等感が募った。その上に自由市場を不当にゆがめて、一企業リスクが国家リスクに置き換わるという「ソブリンリスク」の問題が発生した。つまり近年の金融商品の急激な発達は、「一企業の経営方針が単にその企業の自由裁量の問題に過ぎない」という自由主義経済の原則を、幻想に変えてしまった。

瞑想録(その18)

もちろん米国以外の国はショックの影響を最小限にするために、国内にある米系金融資産の凍結と言った国家自治の範囲内で可能なあらゆる対策を打った。これら一連の対策は、限定的ではあったが功は奏した。但しその分米国経済は国外からの救済が限定的となってかなりの落ち込みを見せた。そしてこの経済収縮が流動性と需要の急激な収縮と言う形で世界に波及し、世界経済が同時に冷え込む騒ぎとなった。もはや一企業の倒産が自由主義経済への重大な挑戦となっていたのだ。

さて現代の先端的金融商品はデリバティブ、CDS、及び今挙げた証券化に限らない。これらもハイリスクだが、もう一つ大きな手法にレバレッジ(てこ)と言う技術がある。例えば先物やFX(外貨取引)など、証拠金さえ積みればその数倍あるいは数十倍の掛け金をあたかもこのようにして動かせるのだ。リーマンショックには梃子が逆向きに作用して、自分が梃子に撃たれてしまったような面もある。さらには空売りなど見せかけ物も日常茶飯事だ。

このように金融市場が国を超えて複雑になってくると、先進国でも「他の国の金融システムが壊滅するよりはトータルリスクが少ないから」と言う理由で、外国の金融市場を間接的に助け合う機運が生まれてくる。逆にこの国レベルの市場介入を予定して、「勝手にやってもいざとなったら助けてもらえるさ」と言った機運も生まれてくる。一種のモラルハザードだ。その典型がEUにおけるギリシャ危機で、結局ドイツはギリシャ人が食うために働いているがごとき形になった。ウォン危機の時の日韓通貨スワップも、似たようなものだ。

さてこの騒動の間に米国当局あるいは波をかぶった他の国々の当局が行ったのは、政府主導による合併や減資や会社整理と言った力ずくの仕事もあったが、こと経済指標に関しては古色蒼然と公定歩合の変更と流通貨幣の調整だけであった。というか、自由主義経済と言うもの、結局公定歩合と貨幣調整以外に自由度がない、きわめて運転しにくい代物なのだ。

方や金融商品がどんどん先鋭化しハイリスク化かつ相互依存化しているのに対して、肝心の市場のコントロールの方法にもはや進化の余地がない。これは核戦争の時代に警官が棍棒を振り回して「コラー！」と叫んでいるのと、たいして変わらないではないか。かといって証券化やレバレッジを「危ないからやめろ」と言うのも、「車は人をひき殺すから廃止しろ」と言っているようなものだ。自由主義経済はもはや原発のように、人のコントロールを受け付けられないような怪物(リバイヤサン)になってしまっているのではないか。

7、不揃いの勧め

土佐の民謡の「よさこい節」に、「坊さんかんざし買うのを見た」と言うくだりがある。かんざしとは女の子にプレゼントするものであり、そんなものを修行中の坊主が買うとはけしからんと言う意味である。果たしてそうだろうか。いくら修行と言っても、そこまで息苦しく堅苦しくやらないといけないのだろうか。所詮は人のやることであるから日々一定の修行さえすれば、ちょっとした息抜きくらい許されるのではないか。

仏教でもキリスト教でもそうだが、万巻の解説書を読み通してなお悟りに至れない、イエスの人格を理解できない頭でっかちが山ほど居る。その一方でほとほとの修行で、「この辺だ」とか「あ、分かった」という勘の良い人もいる。悟りとはそもそもそういうものなのだ。ブッダ自身も「苦行では悟りに至れない」と言っているし、イエスも寝る間も惜しんで救済に日夜数をこなしていた訳ではない。

一般に宗教や哲学や学問では、まじめさや厳密や時間の集中が変に強調される傾向がある。しかも開祖から時代が下るにしたがって、ますますそうになっていく。開祖が祭り上げられてゴールが遠のき、それに到達するための努力が変に強調されて宗教がいつの間にか違うところにたどり着いているというのは、普遍的によく見られる現象である。

これは宗教とか学問とか一般に「法」と呼ばれるものが、何とか開祖に近づこうとして点近似に陥るためだ。点では仮に無限個集めても永遠にご本尊に至れないという無限と離散点の断絶を地で行っていて、それでもなおその方法論の根本的過ちになお気づかないのだ。無限は無限でしか捉えられない。

幾何学に「空間充填」という問題がある。例えば平面は正多角形の中では正三角形、正四角形、正六角形のみが単独で平面を充填できる。もう少し条件を緩めるとこれを歪めた形、例えば長方形やひし形でも平面を充填できる。3次元になると、正四面体かこれの引き延ばしでしか空間を充填できない。つまらない結果であり、平面や空間という拘束が厳しすぎて冗談も通じないことを示している。まるでかんざし一つ買ってはいけない修行のように、がちがちにがんじがらめだ。

街を歩いていると良く、平石を使った道路舗装とか壁作りとかを見る。結構形も大きさも異なったような不定形の平石を並べ、しかもその隙間をセメントで補てんするような「いい加減な」舗装が多い。これを手抜きと見ることもできるが、返ってむしろ安心する自分が居る。石部堅吉のように息が詰まらずに、返って芸術の萌芽すら感じるのだ。

瞑想録(その18)

これは人の本質が、変に肩を張らないでほどほどでスカスカの「整合性」であった方がよほど自然だという、ある意味本能的な安心感に依るのだと思う。この事実を基本とすれば四角四面の道路や壁は隙がなさ過ぎて取り付く島がない。人工的過ぎて非人間的なのだ。

現代は建築、機械、景観、そして仕事に至るまで、変にぎすぎすしすぎていて余裕がない。これでは確かに、皆うつ病になっちゃうわけだ。この背景には、最近の学問や技術科学の異常な発展があるように思う。科学の証明はほんの1つのほころびもあってはならない。仕事も一か所不完全なだけでリコール騒ぎになって大損する。

世の中がここまで完璧であることのさらなる大元には、科学の記述言語である数学の異常なほどの詰まりすぎがある。数字はすべて順序だっており、四則計算の答えは常に一意で、宇宙の法則は統一原理で完ぺきに抑えられている。このような世界観は人によっては完ぺきで対象美に満ちているのかもしれない。だがこの鉄則が人生の全部に及んでしまうと、もはや逃げ場も避難所もなく追い詰められるに至るのだ。

ブッダやイエスの教えについてもこれを研究としてやろうと思えば同様で、いつまでやっても終わらずに返って本質から遠ざかっていく。ブッダの悟りやイエスの人格を習おうと思えばこれを科学的手続きで分解して論理解析するのではなく、むしろ逆にポイントを押さえる感じで「まあこの辺だろう」とやった方がよほど近づけるししかも変に難しくない。

つまり我々はここに、分解・解析・論理と言う手続きが悪魔的であること、そしてむしろ人としての自然な感覚で大掴みにイエスなりブッダの発する波動を掴んだほうがよほど目的に肉薄できることを知る。ここで分析～論理は点に固有のデジタルな手順であり、波動に共鳴して要点を抑えるのは景色を景色のままでモチーフを抑えるアナログ的な捉え方である。

ただ残念なことにアナログはその拘束しない自由系であるという本質上、四則演算とか解析や代数のようなお決まりのツールがない。あくまでも対象ごとにその要諦のありかは異なっていて、そこに統一原理や規則性はないのだ。だからその要諦を他人に伝達しにくい言い訳もしにくい。これは人類知上不幸なことなのだが、どうしようもないのだ。

結局人が自然に生きるには、変に科学や数学の手続きにとらわれずに、むしろ絵画

を見て第一印象を波動で受け取るように自分を波動の受信機にして空しくするに尽きる。誤解を恐れずに敢えて言うならば、科学も宗教も一見正反対でありながら実は同じところを目指しておりあるいは同じものの裏表であって、しばしば同じように間違えしその補正法も多分に同じなのである。そのコツは隙間だらけの平石である。

8、アナログワールドの面白さ

昨年末はピコ太郎と言うピン芸人が出てきて、ある意味シュールな歌芸であつという間に日本を席卷して事件と言うか現象にすらなった。本人もおそらく長い下積みの後だろうが、急発進に驚いてさぞかしむち打ち症になっていることだろう。

毎日判で押したようで変わったこともなく退屈なのを、TVで紛らわしたりたまに旅行に行ったりとかで自分をごまかす世の中や人々や日々。許容された範囲で誰もがやっているような凡庸なことに金を使って、ちょっと気分転換をした気になっている。こういうがんじがらめの平和な時代にピコ太郎現象みたいな予想外なことがあると、自分が当事者でないにもかかわらずなぜかスカッとした気になる。

人々は平和な固まった時代だからこそ、予想もしなかった珍事を渴望しているのだ。その意味ではやはり昨年末に米国の芸人トランプが予想もできなかった大差で勝利した現象も、それが今後の自分の生活に有利か不利かとかそういうことを超えて人々には痛快な出来事であった。こういう異変は、世の中がデジタルに出来上がっているほど起きにくいものだ。

つまり我々はピコ太郎やトランプの登場、少し前ならエドハルミのバカ受けとか英国のEU離脱とかで、世の中がまだふにゃふにゃの魑魅魍魎(ちみもうりょう)なところがあるのだと面白い。株取引だってできれば儲かって欲しいだろうが、単に儲けるだけだと仕事になってしまうのであって、その予測できないアップダウンを楽しんでいるところもあるのだ。

古事記伝を集大成して大和魂の基礎を作った本居宣長に、「敷島の大和心を人問ワバ 朝日に匂う山桜花」と言う有名な歌がある。この表現は簡にして要を得ている。同様にして「アナログワールドとは何かと人問ワバ」、私なら「高い山に登って周りの山々や谷を睥睨することだ」と答えたい。物の見方は色々あるが、アナログとは主要なポイントやモチーフを押さえつつ全体感を波動で感じ取るわけである。

瞑想録(その18)

もちろんポイントとか全体感であるから本質は捉えているものの、例えば「右53度前方36mに何があったか」などという聞かれ方をしても答えようがないし、ある意味そこに何があってもまた何が生起しても良い。むしろその新しいものが生起する余地がある「スカスカ感」がアナログの命なのだ。そしてピコ太郎もトランプもこうして予想の範囲を超えて突然に現れた。

これがもしデジタル世界だったらどうだろう。いつも「 $1+1=2$ 」ではつまらないから「 $1+1=$ ピコ太郎」にしようとか、「1, 2, 3…」といつも同じなのはつまらないから1と2の間に整数「トランプ」を作ってしまうなどと思ってもできるはずがない。そんなことをしたらデジタル世界が天下御免のむちゃくちゃになってしまう。出来る人が居るならぜひチャレンジしてほしいが、デジタル世界にピコ太郎やトランプを矛盾なく埋め込めるだろうか。

埋め込めない理由ははっきりしている。その世界はもう出来上がっていて最早これ以上新しい物が許容できない、厳密だけれども平和すぎて退屈で毎日毎時間やることや起こることが決まっているからだ。決まっているからこそ四則演算とか整列とかの演算手段があるのでありこれは結局良し悪しでトレードオフの問題なのだが、それがデジタル世界だ。

そしてアナログ世界は反対にスカスカでふにゃふにゃで、四則演算はないけれどもとんでもない外道が出てくる可能性に満ちている。今までにない旨い食べ物や美しいデザインやバカ売れする商品が突然出てき得るのだ。ではそんな調子良い物をどうやって見つけるか、常道や定理があるなら誰だってすぐにやっちゃうだろう。だからここはいわば、例外を知恵で探す作業になる。

もちろん偶然に出てきてそれが認知されることもある。例えばアニメで今はやっている擬人化、これは漫画「ヘタリア」が最初である。大元に鳥羽僧正を挙げる人もいて背景的な基層文化としてはそうかもしれないが、ヘタリアの作者が「三国同盟を勉強していて記憶のために可視化したいと思ったのがきっかけ」と明言している。今では擬人化のないゲームの方が珍しい程だ。およそ日本に根付きそうもないハロウィーンが日本ではコスプレ大会として根付いたのも、やはりそう変形できる弾力性というかアナログ性が日本文化にあったためである。

これとは逆に慧眼で自ら「穴」を見つけた例もある。例えば織田信長の桶狭間だ。ここで攻めれば勝機があると気づけたのは信長ほどのヘウゲ者だったからだろう。そして実際に実行して成功し、以後彼はこの成功も肥やしにして日本統一の大事業に船出

した。どちらにしてもこのような新規なことが起きうるアナログ的な緩さ、これが世界の痛快で工夫の余地があることの本質である。その意味でアナログワールドは面白くデジタルはつまらない。

そしてアナログのキーワードは波動である。これは二重の意味を持っている。第一にデジタルの点に対して波動であるということ、第二に無限な対象を無限なままにその本質を感じ取るには必然的に波動とその共鳴作用であるということだ。絵画や景色を見てその心を感じるのは、まさに波動による意志の伝播である。だからもし波動同士に演算が入るならアナログにも演算があることになる。

9、錬金術

錬金術は一般的に卑金属やその他から貴金属特に金を生産する技術、より広くは価値の低いものを高いものに変換する手品と理解されている。確かにその面もあり、現生利益的に人々は高邁な理屈よりも具体的な実現技術の方を強調したが。だが錬金術は実際には術と言うよりも1つの思想体系、あるいは「本来理性」とか「全体哲学」とでも呼ぶべき器である。単純な元素変換については原子物理学ですでに解決されている。

錬金術の世界理解とは基本的に、「世の中は見えざる調和あるいは世界知によって統合支配されている」と言うものである。だからこの世界知に沿えば卑金属の貴金属への変換も病から治癒への変換も可能と言うわけだ。基本的には「天の理」(ことわり)が大から小まで、宇宙も人体も諸元素もすべてを司っているという事物の見方だが、こういう一種の原始的合理化は西洋の錬金術に限らずメソポタミアや中国を含むほとんどの初期文明に見られるものである。

例えば中国では陰陽五行説ですべてを理解し、陰と陽の交代及び火水木金土の5元素とその交代相互作用が天地から人に至るまですべてを司っていると考えた。本来科学であるべき医学も、初期文明や錬金術では「病気は人に満ちる気の乱れでありこれを薬草によって虚から実に戻すのが治療である」と考えていた。医学の父と言われるギリシャのヒポクラテスも「病気は神の支配に依るのではなく地の自然によって発生するものなので治癒の方法はある」ことに気づいただけで、それ自体は医師の誕生を将来させて偉大だったもののさらに外科手術等に発展したわけではない。

ここで注意すべきは一般には「錬金術は理性の欠如だ」と思われているものの、陰陽五行説で見たように合理化精神は実は大いに発揮されている。レンズや電磁計など

瞑想録(その18)

なくあくまでも五感で感じられる限度においてなら、錬金術等はむしろ考える限りにおいて最も合理的ですらある。ただイデオロギーでもよくあるように、問題点はむしろ行き過ぎた合理化で現実を必ずしも直視していない所にある。

西洋で特に中世に盛り上がった変換技術としての錬金術のその大元は、古代ギリシャに端を発していると言われている。これが他の学問と同様に一旦イスラムに伝わってアラビア語に翻訳され、そこではアッラーに近づく手段の一つとして発展を見た。現にアルカリとかアルゴリズムとかそもそも錬金術を意味する「アルケミー」は、いずれもアラビア語起源である。特に化学関係の用語が多いことは、実際に金の生成が目指されたことを示している。

こうしてギリシャで生まれアラビアで育った錬金術は、やはり他の諸学問と同様にルネッサンス期にラテン語に再翻訳された。そして主としてキリスト教の修道士たちによって引き続き研究され、副産物的には今でも使える技術もいくつか生み出した。中には「金の生成に成功した」などと言いふらして金儲けをたくらむ不逞な輩もおり、また術であるために情報が秘匿化されそれがなおのこと神秘性を産んだ等の面倒な経緯はあったが、この発展は16世紀まで続く。

錬金術の息の根を止めたのはルネッサンス期を通して15世紀から始まった、ガリレオやコペルニクスやニュートンによるいわゆる新合理主義である。新合理主義においては、徒(いたずら)に主観に頼らずに現実を直視しようとした。そして地動説、惑星の運動、地球の球形、機械力学、万有引力等が次々に認められるに於いて、肉眼視の合理化よりも現実直視の方がはるかに正しいという科学的手続きが、非可逆的に受け入れられた。錬金術はニュートンを最後の錬金術師として表舞台から去り、今ではむしろいかさまの代名詞になっている。

現代は科学的手続きが極度に発達した時代であり、今更術としての錬金術が復活することは考えられない。だが物の見方としての錬金術、すなわちいたずらに細分化するのではなく世界や宇宙や知を広く一つの汎体系として見ようという志ないしは方法論は、細分化一本槍のある意味ワンパターンな科学に対する一種の反省として、最近見直されつつある。

もちろん細分化して発達しかつ物作りや病気治癒に実効を挙げている学問的体系を、いまさら逆戻りさせるのは明らかに愚かだ。かといってこれだけの複雑な学問体系の、「全部を一人で知ろう」などと言うこともおよそ不可能ではある。だが個々の学問のよ

瞑想録(その18)

り集約された全体知いわば「メタ学問」を設定しようという動きが出始めているし、人のバランスとしてこういう方向が出てきて当然だろう。

つまり現在「学問的手続き」として神聖視されている分解論一本槍でなく、逆に事物を統合してみようとする構成論的議論の活発化である。いわば古代の素朴な合理化の精神だけ生かした、新合理体系の構築である。制御不能になりかけている知の体系を、再び人の側に取り戻そうという動きだ。さらに「分解すればそこで『落ちる知』と言う重大な欠陥が生じる」と言う警鐘も、傾聴に値する。

この動きを錬金術あるいは錬金論の復活と形容したらどうだろうか。せっかく始まった新たなる知の胎動を逆なでするリスクはあるものの、この時だからこそ錬金術の哲学部分や手続き部分だけでも借用しようという態度はむしろ好ましいと思われる。おそらくそこまでメタな新学問では、数字とかデジタルは「些末な厳密」として放棄されるであろう。私はそのような将来の動向を感じるがゆえに、このブログでしばしばアナログについて語っている。

錬金論復活で重要なのは学問的手続きとはまた違った、素朴な疑問とそれを瞑想した結果到達するところの意外な気づきではないか。このような素朴な疑問と意外な気づきの例を、まだそれらをさらにまとめる時点には至っていないものの、私はすでに数十例も例示してきた。

10、シュールな笑い

数年前に短コマ漫画の「クレムリン」で人気を博したカレー沢薫さん(もちろんPNでしょう)が、最近リニューアルオープンした東京写真美術館の広報4ページ漫画「ニヤイズ」を定期的に出していて、なかなかシュールでブラックな笑いで面白いです。漫画は下記のアドレスにあるのですが、ここではこの漫画を例に笑いの構造を見るために、セリフのみをほぼ抜き出してみます。

https://topmuseum.jp/contents/extra/nya-eyes_2016_11/_SWF_Window.html

係り「東京写美ついにリニューアルオープン！」

受付一斉に「ラッシャーセ」

猫の関羽(主人公)「初日の様子はどんなだったニヤ？」

関羽「まさか閑古鳥だったとは？」

係り「押すな押すなの大盛況でした！」

関羽「これは桜ダニヤ、予算が少ないのに大奮発ダニヤ」①

瞑想録(その18)

係り「桜ではないです(汗)」

係り「しかもこの大盛況にもかかわらず、事故や警察沙汰はなし！」

関羽「そんなことはできて当たり前ダニヤ」②

係り「惜しまれつつ一旦閉館しましたが、同じお客様が来て下さいました！」

老人客たち「私たち2年も生きてまた来れたのね！！」③

関羽「写美は病院の待合室ダニヤ」

係り「入館だけならただなので、病院や入院よりお得です」④

係り「友の会パスポートも充実しました」

関羽「きっと説明に手間取ったニヤ」

係り「それを見越して予習してきたお客さんも居ました」

関羽「訓練されすぎでありえないニヤ！」⑤

関羽「新たに導入したポスレジは使いこなせたニヤ？」

係り「慣れるまで大変でした、項目が80もあって」

関羽「導入の意味無いニヤ」⑥

係り「しかも当日慌てないように猛特訓もしました！」

係り「でも当日さっそく1台誤作動でした」

関羽「特訓しても意味ないニヤ」⑦

関羽「エントランスが広くて綺麗になって、お客さんも喜んだニヤ？」

係り「広すぎて落ち着かないという声も・・・」

別の係り「そのうち汚くなるから大丈夫」

係り(速攻で黙らせて)「そのうちなじんでまいります」⑧

係り「迷うお客様の為にコンシェルジュも配備しました」

関羽「迷うほどの施設かよ」⑨

係り「外人向けにバイリンガルも対応しております」

関羽「ピピョボルン語もか？」⑩

係り「ありません」

係り「総じて意外にも思ったより順調に発進できました(汗)」

関羽「トラブル前提だったニヤ〜！」⑪

係り「アンケートも集まりました」

アンケート「バナナココア復活求める」

関羽「フリーダム感は引き続いているダニヤ！」⑫

まあこんな感じです。クレムリンの面子及びシュールな笑いそのままに、わざとらしくなく写美の詳細を解説しています。上手いですね。まあもともと写美が芸術施設であるために、お役所臭くない呼び方が許されているところもあるのでしょうか。

瞑想録(その18)

それで肝心の「笑いの構造」ですが、引用文中の落ちの所に数字を入れておきました。全部で12か所あります。大抵のケースでは写美の職員の方が建前でまじめにぼけているところに、主人公の猫の関羽がツッコミを入れています。このボケとツッコミの関係は漫才等と同様なのですが、よく見るとまじめなはずの職員の方が余計なことを言うとか変わった言い方をして、ボケの方が突っ込む機会をあえて作っています。これが基本的な構造です。

つまりボケはさも何気なく、およそ現実的でないことをまじめに言うとかほんの些細なことをさも大ごとのように表現します。これをツッコミがバサッと切る、ボケの非常識を逆の非常識で切り落とすという構造です。この非常識さ加減とそれをツッコミが客をしてあたかも自分が切ったように痛快にさせて成立します。

この基本的な構造は漫才コンビと同様の構造です。テレビの「エンタの神様」等を見ると、今が旬の若手漫才コンビがボケとツッコミを繰り返していますが、基本的にこの構造です。ただ今回例示ネタにステージ芸を引用しなかったのは、長寿命番組の「笑点」にしてもいま言及した「エンタの神様」にしても、こういった知恵を使った構造のある正統的な笑いよりも、相棒の身体的特徴をあげつらうような品のない笑いの部分が意外と多くて、構造を見つけにくかったせいでした。

今回見た構造の「ボケの時点ですでにずれている」、これ自体一つの知恵ですがもしボケの時点で笑われてしまうとタイミングが狂ってしまいます。ですからぼける方は何気なさを装って、ある意味客をだましながらかけることになります。そこをツッコミが速攻と言うかタイミングよく突っ込んで落とす、この切れ味と間合いが大切です。

この構造でうまく知恵が効いていたとして、なぜ笑えるのでしょうか。これが本日のポイントですが、笑うという行為は以前の記事でも触れたように、①客の側に安全を超えた安心感むしろ過剰なほどの安心感があること、②芸人の側が自虐の要素があって相対的に客が自己優位の立場に立つこと、③やり取りに気づきがあってピシッと落とすこと、の3点が必要です。

こういった要因と構造を持ったやり取りを、一々立ち止まらずに連打で出してくる、これが笑いの基本構造です。その笑いが現実離れしているとシュールになり、本当にありそうだとブラックになります。これらについては受け手の側にも一々分析せずにつまり分解や解析の必要なく反射的に笑える、そこまで発達した脳内の知識経験網と蓄積が要求されていることになります。

11、「科学の時代」の源

現代の時代を画する科学は、15世紀以降に西欧で発達したことは良く知られている。そしてこの大元はギリシャ科学であり、これがイスラムに翻訳された後にさらにラテン語に翻訳されて、ルネッサンス時代のおかげで花開いた。

現在実践されていて大学等でも学び産業界を引っ張る科学技術を一覧してみよう。有機化学合成、電磁気学、解剖医学、造船航空技術等ほとんどすべてが西欧起源である。数理科学を見ても相対論、量子力学、行列、群論、複素数、微積分等、初頭幾何を除いて全部西欧起源である。

中継したイスラムでも学問はギリシャのその単なる翻訳ではなく、それなりの発達を見た。4次方程式の根を求める公式が見出されていたし、三角法(サイン、コサイン等)も見出されていた。それよりも何よりもいくつもの頭の体操になりそうな整数論的な問題が論じられていた。但しこれらはあくまでもモスク建築や祭祀や農耕のためであったために、それ以上の発達はなかった。医学も多分に薬草や鉱石を薬とした内科的診断であった。

似た状況はインド、マヤ・インカ、中国、バビロニア、エジプトと言った文明発祥の地や日本ですら見られたが、やはり高々イスラム科学程度であった。これらの「原始知識」が現在学校で直接に教授されているかと言えば、扱いは多分に文化遺産で歴史研究の対象にしかっていない。

半世紀前に構造主義的民族学者のレビストロースは、現代人の脳構造や事物の把握の構造は旧石器時代に既に見られていて、現代人の頭脳や概念化が特段の進歩の結果ではないことを示した。つまり古代人でも順序だって教えれば、今の最先端科学を理解しうるのである。ではなぜその最先端科学がなぜ、ポストルネッサンス期の西欧でしか生まれなかったのだろうか。

文明論者のトインビーは、「異なった文明の邂逅が新しい文明を生み出す」という法則を見出した。例えばユダヤ文明とヘレニズム文明の衝突がキリスト教文明を産み、インド文明と中国文明の衝突が仏教文明を産んだという具合である。基礎原理が異なっていて互いに矛盾する2つの文明が混ざり合うとそこで何とか妥協し合理化しようという作用が働いて、それが新文化を創造するという基本構造なわけだ。

瞑想録(その18)

この視点からはルネッサンスも西欧文明とイスラム文明の邂逅と言える。ただどの邂逅でも子文明は多くの新しい面を創造してはいるものの、現状の科学技術のような壮大な大変貌をもたらしたのはルネッサンスだけだ。だからそこにはルネッサンス固有の要因があったはずであり、もしその要因がなかったら我々は今でも、薬草で病気を治療し人力で田を耕し星占いで政治をやっていたわけである。その意味で、このルネッサンス特有の要因の明確化は重要である。

一般に言われるのは、まず十字軍によってそれを支える兵站つまり商業と工業生産と金融が発達した。そしてこれらがいずれも理念よりも現物重視で発達する事項であったために、ルネッサンスが物作りと言う現代文明の揺籃になったというストーリーである。これには反対しないが、大軍事に伴う兵站や略奪と言う交易だったら他の文明にもあったはずで、まだ「なぜルネッサンスだけが」と言う問いに十分に答えていない。

現代科学の特徴は事物のありのままに見る、観察と合理的思考である。ルネッサンスそれ自体は「再生」と訳されるように一言で言えばギリシャ哲学の復活であったから、もし単なる復活ならばそれ以上の新たな局面は出てこないはずである。だから問題は、ルネッサンスがどのようにしてどんな新たな事物を創造したかにある。

それは具体的にはグーテンベルクの活版印刷術であり、コペルニクスの地動説であった。一般に活版印刷、火薬、羅針盤の3つをもってルネッサンス3大発明と呼ばれている。活版印刷は聖書の大量配布を通してカトリックの独占的権威に風穴を開け、地動説は常識を疑うことと観察及び現状に即した合理的思考の重要性、そして数学を脳トレだけでなく宇宙の解明に使うという教訓を残した。望遠鏡や顕微鏡と言う、観察範囲を飛躍的に向上させる道具が発明されるのがすぐ後の17世紀初頭である。

ここでひとたび、観察と合理思考の重要性及び常識や従来主張に対する懐疑の態度が大衆レベルで根に付くと、引き続いてガリレオ、ニュートン、デカルト、パスカルと言ったそうそうたる哲理学者たちが綺羅星のように誕生し成果を上げて現代にいたるわけである。だからあえて図式的に言えば、コペルニクスの地動説に始まる懐疑合理主義と、聖書の普及がもたらしたプロテスタントキリスト教と言うおよそ宗教とは思えないほどドグマを持たない信仰の2点が重要条件であった。そして現代の壮大な学問体系はこれらの単なる延長に過ぎない。

ここでも少し深掘りしておきたいが、地動説を唱える人や活版印刷を思いついた人はそれ以前にも何人か居た。ただいずれも単発であって現象や潮流にならなかったし現代にも繋がらなかった。だからここは、コペルニクスやグーテンベルクの天才的ひらめ

瞑想録(その18)

きを称賛しつつも、なぜ彼らの場合は後が続いて潮流となり得たか、その大衆の時代背景まで見ないといけない。マルクス主義的な集団力学は、本来こういう使われ方をこそすべきなのだ。

これはやはりポストルネツサンスの16世紀前後の西欧において、「①合理精神に徹すれば徹するほど生産交易技術が栄えて富と芸術が栄え、②その富が今度はその合理精神を奨励してパトロンになる」という好循環のうまみに大衆全体が気付いたと言うことだ。しかもそれを、本来は守旧が本質の宗教が邪魔をしなかった。この好循環が全く同じ形で400年後の今も続いている。つまり科学的手続きあるいは学問的手続きは、今も生産行為をしているもののものは決して新しくもなんともない。しかもそれは好循環を除けば、旧石器時代と何ら変わらない思考様式なのだ。

私は学生時代から大学等で教える学問の他人行儀な非人間性、人を生産機械に仕立てて良しとする態度に疑いを持っていた。これは要するに人類が、旧石器時代や古代の「危ないけれども彩のある時代」から、知恵の特段の発達もないままに「豊かだけれども冷たく疎外な時代」に、実は皮1枚なのだけれども変貌したせいだろう。科学合理主義が良い面ばかりだとは、私は決して思わない。

12、十六の墓標(上)を読んだ

今から40年以上前に学生運動の結末として、山岳ベースで同志12人を総括と称して殺害した永田洋子の反省的自叙伝の、「十六の墓標」の上巻を読んだ。本の題名が16人になっているのは、前哨戦で総括された2人、事後獄中で自殺した赤軍派幹部の森恒夫、及び派出所襲撃事件で殺害された柴野春彦を、自分に責任があるとして加えたものである。このうち上巻では、生い立ちから始まって前哨戦の2人の殺害までを扱っている。

私が今回永田の本を読んだのは脳の作用機序にかかる瞑想の一環で、極限的状況における人の性格形成や脳の具体的な働きが典型例になると判断したからだ。その意味ではイエスの方舟、エホバ輸血拒否等と同列にあり、今後はオウムサリン事件、バブル景気、三島由紀夫の自決、ナチのユダヤ人せん滅、小学校等でのいじめ、集団生活殺人(尼崎連続変死事件等)等とも比較検討していく予定である。

なお私は彼女よりもかなり若い世代で、私が大学生のころは学生運動もすっかり沈静化していた。依然として運動している学生もいたが彼らに注がれる眼は「変な奴ら」程

瞑想録(その18)

度で、ほとんどの学生はノンポリでありまるで相手にしていなかった。その意味でこの事件自体は知っていたものの、自分の青春の総括と言う意味はない。

この本が書かれたのは彼女が逮捕収監されて後の共産主義のマインドコントロールが解けて正常な常識に目覚めた後であるため、活動当時の自分の過ちも含めた自己批判をまじめに告白している。その意味で当事者のかなりの客観的状況を知り得るものである。本が書かれたのは獄中で第一審の死刑判決が出たところだが、この本はこの判決に対する反論書面でもない。

本文から見えてくる彼女の置かれた状況から見てみよう。彼女が生まれたのは1945年の初めの戦争末期であった。父親は現在の武蔵小杉にあった軍需工場で働いていたようで、徴兵されたとの記録はない。まずこの1945年生まれと言うのが、彼女の波乱の人生に「絶妙な」タイミングだったと考えられる。

終戦直前にソ連が中立条約を一方的に破棄して侵攻し、多くの日本人を拉致した。いわゆるシベリア連行である。連行当初ソ連は日本人をシベリア鉄道の労働力として利用していたが、次第に世界共産革命の先兵として利用することを思いついて思想改造教育を施した。彼らの多くはダモイ(日本帰還)で舞鶴港や故郷の山並みを見ると感涙して教育など忘れてしまったが、一部の人は本当に共産化して1950年代には日本中で労働争議が頻発した。永田はこういう環境で少女時代を過ごした。

こんな環境にあって永田は、特に女性の自立と男女平等を自分の使命と感ずるようになって薬科大学生になった。だが他方で自分が育った戦前式の家父長的家族雰囲気嫌うこともできずに、自己矛盾の塊となった。そしてその矛盾を相克するのに彼女は、「自己内の矛盾を無視する」と言う方策を選んだ。もちろん賢明な選択ではない。その無視のために彼女は社会の肌感覚や社会常識あるいは自由恋愛等に関して全く麻痺して進歩がないままに、ある意味精神的かたわとして大学を卒業した。そして女性解放の可能性を、当時盛り上がっていた共産主義学生運動に託した。

具体的には工場等に勤務して労働者になりつつ大衆を教化する形で、マルクス主義のソ連や毛沢東の中共のようなプロレタリアート市民革命を達成するための一兵士になろうとした。ところがちょうどこのころに日本の共産主義革命運動は、大衆主導と言う途方もなく遠く非現実な道を選ぶか、あるいは手っ取り早く目覚めた一部の先達が武力によって先ず国家を共産化したのちに人民を思想改造するかの、大きな2つの流れに分裂する。

瞑想録(その18)

この流れの中で先のも指摘したように十分な社会常識を醸成できなかった永田は、誘われるままに武闘派の方に所属し、しかも「多分にやる気があり使いやすい」という理由で現場の幹部に取り立てられる。当時の共産化学生運動の幹部たちはそのほとんどが口では国を憂うようなことを言いながら実は自分の王国を作りたいだけの、軍閥顔負けの私利私欲のみの野心家であった。しかもマルクスや毛沢東の言葉など聖書ほど厚いので、適当に見繕えばどんな自己正当化もできてしまう。本当の悪は影の见えないところに居て永田は上手く使われただけなのだが、人を見る目のない彼女にはその理屈の嘘を見抜く力もなかった。

彼女は京浜安保共闘(革命左派)に所属していた。そこにやはり武闘派の赤軍派が旅客機乗っ取りのヨド号事件等の世間を騒がす闘争を実行していたので公安の取り締まりが厳しくなり、彼女らも都心から郊外へ郊外から日本の果てへ日本の果てから山岳地帯へとアジトやベースの退却を余儀なくされた。言いかえれば日本の警察はそれほどに優秀だったわけである。一時は中国に転戦することも考えていた。

こうした流れの中でこれまでもその過激な「銃を軸とした革命闘争」についていけなかった常識がある若者は次々に離れて行った。だがさすがに山岳に退却して後がなくなると落伍者を放置する余裕もなくなって、スパイ及び自供者は処刑するという共産主義の先輩たちがやってきた原則に則ることとなる。つまり常識的な「寸止め」ができずに、革命左派も脱走者の始末を決断することとなる。まず奥多摩ベースから脱落した早岐ヤス子、向山茂徳の両名を殴打の上絞殺して印旛沼近辺に埋めた。

ここで永田は自ら手を下したわけではない。先にも指摘した未熟な精神構造により彼女には集団引率力も路線企画力も全くなく、リーダーとしての素質はなかった。ただ常識と言う足かせがないために、革命的徹底者として現場幹部になったのである。だから梟雄のように両名気に入らなくても生かしてうまく使って使い終わったら捨てるという芸当もできずに、偏狭に理論通りに殺害を指示承認してしまった。ついに一步を踏み超えてしまったのだが、他方で永田の意識下に「自分は恋愛をあきらめた」と言う意識があったために、美人のあるいは恋愛中の男女にあたかも抜け駆けでもされているような強度の嫉妬心を抱くに至ったのも実の動機である。

私が今回永田の本を読んだのは、「脳の働きは連続体であって点思考では理解できない」とするアナログ理論の一環だ。本日彼女らから学べる一番の教訓は、日々の肌感覚や健全な常識がいかに大切かということだ。政治運動だろうと宗教だろうと同じことだがスローガンと言う一面は真実だがあくまでも一面的でしかないデジタル論理の不自然な嘘を見抜けるのは健全な常識であって、学力や論理力ではない。脳内に

おける社会的肌感覚と勘の多面的な醸成、それが一面的イデオロギーに乗せられない重要な能力だということである。

13、学問を専攻する意味

先日「科学の時代の源」と題した記事で説明したように、現代の神的存在である神聖な「科学的手続き」、これは16世紀以降に「現象を科学することは新規製品の創造を通じて大いに儲かる」ことが大衆レベルで理解されたからでした。以後「科学技術＝儲け」の好循環が続いて現代があります。

つまり科学的視点の大切さは、学校で習い今でも多くの大人が信じているように「善良で確実で誤謬がないから」ではなくて、「新製品開発を通してウハウハ儲かるから」です。実際大学までに習う教授内容を見ると、そのほとんどが16世紀以降の新合理主義の時代に発見された事実と技術です。ただ現代の学生がこれらを習うのはそれ以前の時代の知識が幼稚だったからではなく、単に儲からないからです。

実際に特に大学で専攻する専門科目は卒業した後社会人になって売れる新製品を発明する知恵と技術が身に付くように、端的に言えば学生が会社に売れるように取り揃えられています。理系だったら新製品をものにする実験技術、文系だったら会社等組織の具体的な管理技術です。ちなみに大学と工業高校や商業高校の違いは、これも端的に言えば前者は新規製品を作る能力、後者は新規製品を使う能力の涵養と言うことになります。もちろん使うよりも作る方が経済効果ははるかに大です。

ですから「大学は真理を学び人格を養うところ」などとまじめに理解している学生にとって、大学生になっての多くの感想は「つまらなくてがっかりした」です。もちろん大学は嘘など教えませんが、立派な人にさせてくれるところでもなければ興味深い学問を伝授してくれるところでもありません。大学はあくまでも売れる人に変換してくれる一種の高級奴隷養成所ですから、理想の追求など木に寄って魚を求めるようなものです。実は私もそうでした。

もっとも多くの学生は、こうまじめにすら考えていません。ほとんどの学生が十か所も併願してたまたま通った大学の学部に入るだけです。初めから思い入れなどなくて教授の言うことを鵜呑みにして自ら型にはまって終わりです。つまり結果的に言えば、私の方が世間知らずで愚かだったわけです。世の中は多分にこんなものです。

瞑想録(その18)

そんなまじめな私ですから大学の授業にもそして会社の仕事にも単に強制されたとか感じずに、ただ時間を垂れ流させられたとバカバカしく感じています。それは私自身の偏った性格に依るところもあったでしょうが、今日ここまで記事をまとめてきてその核心が分かりました。要するに大学とは実は自ら奴隷に身を落とすためにある、いわばアウシュビッツのようなおよそ希望のないところだと言うことを、言葉にはならなくても直感していたからでした。

何かの分野の専門家になるということは、①既存の型に強引にはめられることであり、②他の分野を捨てることでもあるのです。どこに人としての自由があるのでしょうか。学びの喜びなどおよそあり得ません。私はこのころから、自分がもっと既存の延長でなく偏っていない「総合的な物」を模索し始めていたように思います。実際に学問的喜びだったら、自分で本やネットでつまみ食いした方がよほど得られます。

ところで今大学を「食うためのテクを身につける場所」とくさしましたが、くさした上でさらに瞑想を深めて気付いたのは、もし大学が食うためのテクにすらならない知識を教授するところだったらどうだろうかと言うことです。マニアックな例えばラテン語とかカント哲学とか塩政史とかを教授されて「テストで点を取らないと卒業できない」などと言われたら、よほどその分野にマニアな少数の人を除いて絶望に打ちひしがれるでしょう。つまり一般的に言えば学生は、「将来の飯のネタになるから」と自分に言い聞かせて面白くもない授業に、まだ出られるわけです。

大学の先生方は「ここは学問の場であって学問以外のことは知るところではない」と悪びれずに言いそれで通ってしまうのですが、確かにこれ以上を大学に望むのは望む方が馬鹿でしょう。ここはもはや大学を離れて、「自分は二十歳前後の貴重な時期に何を習得し経験すべきか」を自分で考えて自分でその場所に赴くしかありません。親の跡を継げば済む人は人脈作りにいそしめば良いし、起業したい人はその手の私塾に通うべきでしょう。歌舞伎等古典芸能の名門の子なら日々の修行の方によほど総合的価値がありますから、大学などで時間を垂れ流すのは愚の骨頂です。

ただ誰にも大切に大学が知らん顔の技術である「自己防衛力」、これはぜひ身に着けて欲しいと思います。自己防衛力とは言い換えれば「穴(けつ)まくり力」です。人生の内には何度か、ここは逃げないとはめられるという場面に出くわします。その場面的に的確に把握して、いざとなったら責任も何もすべて放り出してトンズラする能力です。

1年ほど前に電通で、東大を出た美人の新入社員が仕事上のいじめが原因で自殺してしまったことがありますが、これなど好例です。優秀でそれまで苦労なく、また並

み以上の家庭に育ってトラブルも経験しなかった温室育ちが、返って逃げる練習に恵まれなかったという不幸な例です。このテクは自分で学んでください。私はサークル等で経験しました。つまり大学からは何の良いものも得ていないということです。

さてここまでは一般論を客観的に三人称で述べてきましたが、この段落では自分の主観を一人称で述べます。私は新合理主義以降の学問的手続きと言うワンパターンに全く興味がない、むしろ自分の性格や哲学とは真逆であると気づきました。ですからこれまでもそうでしたがこれ以降ますます、科学的手続きやその成果を無視します。成果である医療や車は利用しますが、利用するだけです。

そして私自身はむしろ、新合理主義以前の錬金術の時代に戻っていきます。いわば新錬金論に依る総合知の世界です。もっとわかりやすく言えば、大切なのは個々の技術ではなくそれらからどういう世界観を得るかなのです。

14、十六の墓標(下)を読んだ

今から40年以上前の70年代学生運動の結末で、逃亡先の「山岳ベース」で仲間12人をリンチ殺人した首謀者の1人である永田洋子の、事件のあらましを詳細に記した獄中での懺悔報告書である「十六人の墓標」の下巻を読んだ。この一連の本の位置づけは2個前の(上)に関する記事にまとめてある。

(下)の内容は連合赤軍の正式結成から山岳ベースへの「転進」、その山岳ベースでの「総括」と称する仲間12人のリンチ殺人、そして妙義ベースにおける永田と森恒夫の逮捕までである。ちなみにこの時に逮捕を逃れた一団5人が軽井沢で別荘にこもり、あさま山荘事件を引き起こした。

連合赤軍はいずれも先鋭的極左であった赤軍派と革命左派が勢力回復の為に大同団結したものであって、赤軍派のリーダーは森、革命左派のリーダーが永田洋子であった。但し永田は性格的に極端であったところを当時獄中にあった黒幕の川島豪に利用されたものであって、本人にリーダー的素質はなかった。森も理論派ではあったが、現場隊長向きの理屈一点張りの性格に過ぎなかった。

連合赤軍の統一は世界共産主義革命運動を、労働者である大衆の盛り上がりを待つて行うのではなく、蒙昧な大衆は後回しにして先に国家を共産主義化してしまいその後労働者を教育した方が早いとして、積極的に銃を軸とした暴力革命の道を選ん

瞑想録(その18)

だ点が共通だった。そして初期には都市周辺のアジトを拠点として活動していたものの、警察によって次第に追い詰められて山岳に逃げ込んで孤立したのが実情である。

この世界共産主義同時革命の発想は、当時ソ連と中国が既に共産化しており、大国の米国もベトナム介入の失敗で行き詰まりかつヒッピーのような反戦平和運動が活発化した等の状況から、共産理論の本道である世界同時革命の機が熟したと判断して起きたものだ。だが当時の日本は高度経済成長の仕上げ期にあって、労働者が農奴化していたロシアや中国の革命当時とは真逆であるという致命的な違いを学生たちは見抜けなかった。あるいは若者が自らの手で国を動かせるのではないかと、見果てぬ夢を見た結果かもしれない。

こうして山岳に追い詰められ人民の支持も失った連合赤軍は、結局そのエネルギーを内に向けていくことになる。具体的には公安に発見され逮捕されないための疑心暗鬼であり、そこでは自己批判と総括が常套句となった。自己批判とは「反省」の学生運動用語のようなもので、総括とはそれら自己批判をまとめて今後の向上を誓うものだが、こと山岳ベースでは洗脳と抹殺の意味で使われていた。

彼らが一番恐れたのは逃亡者のタレコミとスパイであり、これらに該当すれば当然に死刑なのだ。山岳ベースでは誰もが疑心暗鬼になっており、特にリーダーで理論派の森が猜疑心の強い性格であったために、現実的には森が気に入らない人間に自己批判や総括を要求し、細かな間違い(森個人の理論構成との違い)や揚げ足取りなどでもっともらしい理論をかぶせて集団暴行死させたものである。特に森は徹底を常にしていたが、この一連のリンチ殺人は、徹底も過ぎると狂気だという反面教師にもなっている。

暴行は総じて「肉体的極限に追い詰めることにより真の革命戦士に高まるための愛の行為」と位置づけられてなされ、暴力の結果その人が死んでしまうとそれは革命に奉仕できなかった「敗北死」であり自己責任に過ぎないと位置づけられた。こうやってリーダー側を正当化するとともに、総括がやまずに続いたのである。この辺の巧妙な論理構成はオウム真理教のそれと似たところがある。

この12人がどういうレッテルで総括されるに至ったのか、それは一々が些細なことであって今読み終わったところの私も思い出せないほどだ。レッテル自体は「革命の把握が間違っている」とか「自己批判は演技だろう」と言ったあたかもキリスト教の異端審問のようなものだが、ここで正しいとは森の論理構成と完全同一でなければならず、

瞑想録(その18)

かつ本当のきっかけは「態度が気に入らない」とか「無理筋の指示に失敗した」等の本人の責に帰せられないものばかりであった。

キリスト教と言え、自己批判も少なくとも山岳ベースでは定期的かつ強制的になされていて、それはカトリックの懺悔あるいは告戒を連想させる。反省のネタがなくてもネタがないこと自体が怠慢とされ、でっち上げでも反省の弁を述べねばならず、そしてその弁が総括のきっかけとされていった。

もう一点指摘したいのが、森の死刑宣告はちょっと考えれば表面的な理屈であって自然な肌感覚があればひっくり返せるようなものであったのにも関わらず、理屈のみで全員があたかも蛇に見込まれたカエルのように身動きが取れなくなっていることである。もともとそういう性向の人が革命運動に参加しやすいのであるが、それにしてもここまでの理屈至上主義は戦後の合理化教育の成果である点を指摘しておきたい。教育が江戸時代の寺子屋や藩校のような全人教育だったなら、こういう見え透いた事態には自己保全ができたであろう。戦後教育がやはりキリスト教的色彩で構成されていることを思い返すと、12人のリンチ殺人は深層ではキリスト教の悪い一面であり戦後教育の欠点であると断罪しておく。

注意すべきはこのような密室の内向きリンチは、ここまで極端でなくてもやはり閉鎖した集団で競争が本質の会社や親族会議等でも結構見られることだ。だから我々は自分を不当な嫌がらせから守るためにも、これら山岳ベース事件を他人事と思わずに、他山の石としてシミュレーションすべきだと思う。

なお2人のリーダーの内森恒夫は獄中で首つり自殺をするが、残された遺書にはリンチ被害者への反省文はない。遺書から読み取れるのは理論家の森が逮捕された自分の失敗への自己批判として、いわば自分で自分を総括して13人目の死者とした感じである。永田洋子は獄中でいわば人間感覚を取り戻してこの本を書いたが、死刑判決後に獄中で病死している。

15、価値と価値観

価値は事物の客観的な指標で、第一義的には値段と言う数字か。他方価値観は主観で、例えば粗末なペンダントも親の形見ならその人には貴重になる。まあ一字違いで大違いだ。以下にそのような例を挙げる。

<浦島太郎>

瞑想録(その18)

浦島太郎はカメを助けるという善行をしたにもかかわらず、最後は爺さんになってみじめになったのは不条理だ。この点については以前に欧米の似た話のリップ・バン・ウィンクルと比較の上で、条理通りなら単に教訓話で交通安全の標語に過ぎないが、不条理だから文学になりうると解釈してある。

この解釈は今も変わらない。だがあれから何年も人生をやり世の中の相場観が見えてくると、「たとえ夢であったにしろ竜宮城であれだけ歓待されて乙姫様にも特別に親切にしてもらえたのだから、仮に最後は爺さんでもトータルとしては結構幸せな人生であり決して悪くない選択肢だよな」と思えてきた。これは価値観なので、人によって賛否は異なるだろう。私は今度カメを見たら助けるよ。

<タマ駅長>

タマ駅長は和歌山県の寂れたローカル私鉄が生んだ、猫の駅長である。駅長になる前は駅の近くの倉庫でノラをしていたという。ところがこのどこにでも居るような価値は零の野良猫に会いにわざわざ自腹を切ってやって来る人が、なんと外人も含めて山ほど居るという。飛行機に乗ってわざわざ元野良猫を見に来るのだ。まあこれも価値観の典型だ。

世の中には廃墟マニアとかガルパン親衛隊とかおよそ理解できない趣味が山とあるのだが、私が一番分らないのはこの身銭を切ってペルシアンでもロシアンブルーでも何でもないただの猫を見に来る人たちの価値観だ。身銭を切ると言うことはどこかの会社で自由を捨てて働いた報酬を、この「イベント」に喜んでつぎ込んでいるということだ。

人並み外れて束縛嫌い会社嫌いの私から見れば、稼ぎが自分の風呂代や医療費に消えるのだって悔しいのに、こんな見え透いたしょうもないイベントに金を出すとは。どれだけ金余りでよほど楽しいことがない人か知らないが、他人事ながら気が狂いそうになる。だったら私が猫の着ぐるみをして駅長をしてやるから、私に賽銭を投げてくれよ。

それとこの現象についてもう一つ不思議なのは、これだけ安直なアイデアで稼げちゃうのならどうして日本中の左前の会社の社長さん達がこぞってマネをしないのかと言うことだ。現にユルキュラなんか日本中に山ほど作られているではないか。沈没寸前の東芝なんかキツネを使って「ゴ〜ン社長」ならぬ「ゴン社長」など始めれば、自社製品の安くて良く効く宣伝になると思うがどうだろう。

瞑想録(その18)

日本人は某隣国人ほど節操なく他人のアイデアを盗む民族ではないにしても、廃線寸前の赤字ローカル私鉄だけでも山ほどあるのに、どうして柳の下のドジョウを狙わないのだろう。やっているけどタマほど盛り上がらないから私が知らないだけなのだろうか。

<商店街>

私は商店街の風情が好きだ。レトロで昭和のにおいがする。でも私自身はここ数年、商店街で買い物をしたことがない。矛盾と言えはその通りなのだが、これが現実なのだ。私の近所もマンションが建って人口は増えているが、商店街はむしろ縮小方向にある。もはや歯が抜けたようで「街」とは呼べないほどだ。

商店は一言で言って効率が悪い上に商品が高すぎる。ねじめ正一さんで有名になった高円寺純情商店街の近くに住んでいたこともあるが、商店街とは単に古いものを高く売りつける商店の集まりだった。しかも分野ごとに一軒一軒回らないといけない。店守はたいてい若夫婦でやっているが、ちょっと裏を覗くと親子3代10人くらいがあたかもサザエ一家のようにバカっぽくどっと住んでいる。なんで我々市民が彼らの扶養をしないといけないのだ。

商店街の風情と価値は認めるが保存活動には協力しない。その結果商店街が消滅しても仕方ないと言う価値観に居る。

<花より団子>

偉いけれども閑職なのと充実しているけど平社員なのと、どちらが良いだろう。もっと端的に寒風吹きすさぶ小樽で庄屋なのと気候の良い館山で百姓をやるのと、選べるとしたらあなたはどっちだ。私は花より団子なので館山の百姓の方を選ぶが、世の中の大半は小樽の庄屋の方を選ぶ、そういう価値観のようだ。ちょっと古いと思うけど、価値観はそれぞれの勝手だ。

<意外な出来事>

うっかりドブに落ちた時にあなたは、①「くそ～汚れちゃったぜ」と思うだろうか、それとも②「容易には得難い貴重な体験をした」と思うだろうか。ドブ落ちに限らず一般的に嫌な目や期待と違う結果が出た時に、あなたはその事件をどう思うだろう。これは究極の価値観だ。

ちなみにキリスト教では「ドブに落としてくれたことを神様に感謝します」と、常に主を賛美するように指導されている。とその結果「どうせ何をやっても御心の通りにしかな

瞑想録(その18)

らないさ」と言う投げやりな信徒が、実は山ほど居る。だが逆にどんなことにもつぶやいていても、性格が卑しくなり人生が何でもつまらなくなるだけで良いことはない。この辺の価値観のかじ取りが難しい。価値観は単純ではないのだ。

<損得>

バスに乗った時にそのバスの料金体系が定額制だとして、①「とにかく早く目的地に着きたい」と思うだろうか、それとも②「定額だったら長く乗っていた方が得をした」と思うか、どっちだろう。もっと極端に新幹線が10分で東京から大阪に着いて運賃が10万円だったら、客は今より増えるだろうかそれとも減るだろうか。

価値観と言うのはこれらの例で見ると単純でなくて、悩ましいところがある。

16、レビストロースの位置づけ

先月にNHKのEテレで、中沢新一先生が著名な民俗学者であるレビストロースについての一連の講義をしていた。レビストロースは構造主義の先駆者のひとりで、その成果は今でも学会全体に隠然たる影響力を持っている。「なぜ今構造主義なのか」は分からなかったが、中沢先生の話聞いて若いころは理解できなかったレビストロースの成果の輪郭が見えてきたので、ここでまとめる次第である。

彼の業績は民俗学と言う文系の集約が難しい叙述的な学問分野に、構造と言う理数系的発想を導入したことにある。その典型的な例に、「トーテム理論の位置づけ」がある。レビストロース以前にも一通りの民俗学はあって、特に未開の民族の非合理的な因習の存在についての一連の研究がなされていた。

それらの研究は欧米の研究者にありがちな「未開な物は切り捨てて無視する」という立場に比べれば、トーテムが認められかつ注目されたという意味ではそれなりの価値があった。ただ彼らはどうしても先進文化と言う上から目線で、未開文化をあたかも動物の生態を観察するがごとくに見、しかも単に記述的にしか解明していなかった。

これに対しレビストロースは民俗学を、当時先端であった数学の道具である交換、群、集合、作用素と言った概念でより深掘したのである。そしてその統一的視点から未開文化の核心である、構造のみを取り出して集約した。その結果彼は、①現代科学技術の合理精神と全く同じ能力が既に旧石器時代の人類に存在していたこと、②そして旧石器時代の人々の発想が未開と言うことはなくむしろ過剰なほどに合理的であった

瞑想録(その18)

ことを見出した。つまり現代人と言っても同じ合理的能力を、科学と言う皮一枚新奇な対象に適用しているにすぎないのである。

この結論は当時相当に衝撃的だったはずだが、幸いなことに毛嫌いされずあるいは無視もされずに直ちに人々に受け入れられた。そしてこれは民俗学に留まらずに、基礎哲学あるいは常識としても極めて画期的なステップであった。彼以降しばらくはどの学問分野や芸術分野においても、すべてが構造主義一色になったほどである。

例えば数学では「ブルバキでなければ数学にあらず」という風で、構造のみをその具体的な内容や現実との対応と切り離して極限的に論ずる風潮が流行した。「なぜ群が大切か」というのは構造主義からは下らない問いで、単に群の構造さえ理解すれば良いという立場を取る。あるいは「なぜ古代人が自分を勇ましい動物と同一視するか」は本質的ではなく、その同一視と同じ合理性が現代人にも存在することを認めるべきだという事物の捉え方であった。

ヒルベルトらが始めた公理主義が世界を覆いつくした。まあ近代化と言う時代の流れに、当時はそれが合っていたのであろう。だが構造主義は本質や構造のみにこだわるあまり、あたかも骨を指して「これこそ人間だ」と言うかの極端があった。そしてこの極端は現実を離れた空論主義や机上の観念論と言うあだ花を産み、これが回りまわって共産主義運動や社会革命的學生運動と言う不毛な空転をもたらしたことは否めない。

つまり構造主義は副作用として一番多様で面白く人間的で温かい肉の部分を切り捨て、人を疎外し人間性を捨てさせて不自然にする作用もあった。そして現代は時代背景として構造主義の極端を中和してより現実に戻る、「ポスト構造主義」の時代である。つまり構造主義とは一度は通過すべき洗礼対象ではあったが、今は「もっと肉も見よう」という風潮に世界全体が進歩した。

レビストロースが活躍したのはもう半世紀も前のことである。そしてどの分野でも半世紀も経てば仮にどんなに立派な理論でも、そのエッセンスは咀嚼され吸収され終わっている。そしてことその原著に関して言えば、「もはや古い」の感は免れないものである。この感性に基づくならば我々はレビストロースの着眼点に感心しつつも、もはやこれを乗り越えるべきであるし実際に乗り越えていると言える。

身近な例では笑いも絵画も小説も、コント55とか岡本太郎とか芥川龍之介とかは「偉大だろうがもう一味古い」と感じる。むしろ今日の現役組にしてみればその分野の「太

い筋」は先人によって既にやられているためにこれら先人の成果が一種の阻害になって、新人はあえて奇妙奇天烈を狙わなければならないという運命になっている。これは一種の構造的な矛盾ではある。

こういう時代だからこそ私は、今こそ偏見のないトーテム主義に回帰したいと願っている。本来のトーテムは人の温かさと豊かな合理性に満ちていて、まるでそれが一つの壮大なワクワクする物語のようだ。私は民俗学や芸術はもとより、すべての学問の礎石でありかつ本来的に構造的でしかありえないと思われていた数理科学をも、ポスト構造主義的にトーテム化したいのである。

以前の記事でも触れたが、現代の学問や授業はそのほとんどが16世紀以降の西欧で生まれた新合理主義の科学精神の産物である。これは科学を経済の原動力の面だけから有価物と認めて学習を奨励している、きわめて目先主義の風潮である。今の大学は体の良い職業訓練所だ。今学んでいることが本当に人生を豊にするのか、一度深く内省することを勧める。端的に言って群論や虚数がアラビアのクイズ数学より優れた脳トレだとは、全く思えない。

17、私流アイデアの出し方

どの分野のどんな人でも、新規アイデアを思いつきかつそれを育てて何らかの形とすることは重要な成果です。会社なら当然に、売れる新製品の創出が何よりの出世コースです。会社はそもそも儲けるためにある組織ですから、ほかのどこよりも新製品の重要性は明白です。ですがたとえ趣味だとしても、新たな経験をしたいとかほかの人と違う独自性を出したいとか、そう言ったアイデア出しも大きな楽しみです。

さてそう言ったアイデアの捻り出し、これは脳の典型的な作用であり存在価値でもあるのですが、容易ではない上に物理の統一理論のような常道などはありません。もし常道があれば誰でも安易にそれを試みるので、そうして出るアイデアはおおよそ新規ではないでしょう。特に会社でトラブルがあった時に誰もがバカのようにやる「水平展開」、これがこの好例です。

また、新規なアイデアが「都合良く常に出る」などと言う保証もありません。もしあるなら潰れる会社などないでしょう。むしろそういう調子の良いことはない方が普通です。ですがここで少しでも良いアイデアがよりたくさん出るにはどういうコツと知恵が必要かを考えてみるのは、価値があることだと思います。

瞑想録(その18)

一般に思い付きが結実するまでには、①素朴にアイデアを思いつく、②それを具体的な形に表現する、③使えるか(売れるか)を試験的に試して顧客の反応を見る、④現実に使って(売って)成果(儲けとか喜び)を得る、と何段階ものステップがあります。しかもその各ステップ、いずれも透過率は決して高くありません。

本日はそのうち第1ステップの「アイデアを思いつく」について、少しでも新規性の高いアイデアを思いつく方法を見つけるために、思いつくという脳内プロセスを瞑想してみました。結果を定量的に示せると本当は良いのですが、アイデアと言う質を伴うもののアナログ性により、今のところは言葉でしか表現できません。

アイデアの思い付き方は大きく分けて3通りあります。すなわち①こうあるべきだと現状に論理的考察を加える、②何か良いアイデアはないか既存品等から連想してみる、③なんとなく意識下で気にしていたらふとひらめく、の3通りです。そして①よりも②、②よりも③の方が物になる可能性が高いようです。

理屈で考えているうちは関係している所与の諸条件の内側でしか思いつきませんが、そう言うアイデアはたいていつまらないです。つまり線形代数やベクトル解析あるいは論理学と言った「点思考」、デジタル思考脳でいるうちはおよそ駄目で、その人は脳改造が必要でしょう。

どういう脳改造が必要かと言うと、事前に説明や理屈や言い訳を考えずに原始人、旧石器時代人のアナログ脳に逆進化する方向の改造です。一言で言うと、文明化や進化は必ずしも善でないことに気づくことです。実際縄文土器の装飾性の高さや少数民族ほど衣服のデザインが華美なことは、ちょっと博物館回りをしてもらえれば分かることです。こういう人々のことを赤瀬川原平さんは「才能しかない人々」と呼びました。爆発画家の岡本太郎さんもこの境地を目指しました。新規アイデアに文明的な論理や情報はむしろ有害です。

枠外にあることに加えて、新規アイデアはまず例外なく多面的です。ですからこれに論理を作用させると薄っぺらに一面的になって、せつかくのアイデアが死んでしまいます。さらにその新規アイデアは多分に区画特定できません。あくまでも「こんな感じ」であって「この点」とか「ここからここまで」とか「AとBから成る」とかそう言う決めつけをしようとする、やはりアイデアが死んでしまいます。

今ここで列挙した決めつけを見ると一々が、デジタルや現代数学あるいは科学技術的手続きに通底していることが分かります。我々は現在科学技術のおかげで豊かな

瞑想録(その18)

暮らしをしています、ことアイデア創生においてはこれらのデジタル的発想は百害あって一利なしです。一言で言ってアナログ脳の時代に戻るべきです。アナログ脳と言うことは波動(バイブレーション)で感じるということです。

ではどうしたらこういう脳になれるのでしょうか。これはデジタルと違って、座学の授業を受け身で傾聴することによっては身に付きません。アナログはそういう安直のマスプロではないのです。ただ一般に、人は覚えるよりも忘れるほうが難しい。つまり一度大学等で習得したものを捨てて「動物的勘に戻れ」と言っても、現実には多分に不可能です。ここに現代人の不幸があります。

世の中にはもともと勘が良い人もいますが、私も含めて多くの人はそうでないので、トレーニングとしてはアナログ的に波動で感じる場数を踏むことです。場数を踏むと言ういかにも手間がかかって大変なことに聞こえるかもしれませんが、アナログは人の本来の性格に順応していて本能にも近いので、その作業はむしろ楽しいものです。

私が良く利用するのは美術館です。素人の公募展(たいてい入場料無料)で十分ですから、色々な人の絵や彫刻を素心で眺めてください。そうすると理屈以前に「この作者はこういう心象を表現したかったのだ」といういわば作者との対話ができ、あたかもその作者と旧知の中であつたような親近感が生まれてきます。これがアナログ的理解であり波動の伝播、つまり作者が発信した波動を受信共有するモチーフ理解です。

そして「ああなるほど」と分かったらその素の心を大切に、それ以上言葉にするとか分類するとか説明するとかはしないでください。分別をすると波動が点に縮退して死んでしまいます。現に点は多面的でもなければダイナミックに振動しても居ないし広がりもありません。そのような物に感動は収まりません。むしろむき出しの波動のまま脳のストックとするわけです。

アナログですから人によりまた見方により前後があつて差異が出てきますが、むしろその方が望ましい本来の姿です。ここの絵画はいわば天空の星のようで、それぞれ孤立して輝いていて連関などありません。無理に理屈でくっつけると死んでしまいます。星座のように大まかに景色をつける解釈法はありますが。

そしてあなた固有の気づきこそが、実はしばしば一番有望な思い付きです。

18、自由と束縛

瞑想録(その18)

もう平成も終わろうというのに、80年も前の昭和初期の歌を出します。通称「昭和維新の歌」で、二二六事件への心情的な導火線の一つにもなりました。ここは分かりやすさの為に、歌詞を超訳して紹介します。

- 1、昔正義の人が身を投げたこの山川は、今風雲の時を告げている。
この腐った時代に立ち上がれば、正義の怒りで血がみなぎるのだ。
- 2、権威は上に座って威張っているが、国を憂える誠がない。
財閥は蓄財に懸命だが、国や民への思いやりなどない。
- 3、俗物が栄達して国は滅んでいく、盲目的な奴らが大きな態度だ。
流転や興亡は皆一瞬の夢で、世の中など所詮は一局の碁だ。
- 4、明治維新ならぬ昭和維新の春の空、正義に団結する若者たち。
胸中に百万もの同志を持ち、桜花が千々に散り飾る。
- 5、古い死体を乗り越えて、雲のように身軽で自由な我々だ。
国を憂いて立つのだから、男子の歌(この歌)はまさに相応しい。
- 6、天の怒りや地の雄叫び、ただならぬ響きだ。
人々ら永遠の眠りから目覚めろ、日本の夜明けだ。
- 7、天から深く雲が垂れこみ、海はこぞって雄叫びを挙げている。
維新の時が来たぞと、日本を嵐が吹き荒れている。
- 8、腐った今の天地の、迷いの道を人は愚かに進んでいく、
栄華に見えて塵ほどのこの世で、高みの見物とは誰だ。
- 9、功名など夢ほど下らない、消えないものはただ誠だけだ。
君が意気に感じるなら、成功か失敗かなどどうでも良いことだ。
- 10、もう他人事の嘆き節(この歌)などやめよ、そんな時は終わった。
今こそ我々の銃剣が、腐った古いものをぶった切るのだ。

私も決して若いとは言えませんが、この歌は私が生まれるよりはるか前の歌です。だいたい戦前と戦後で日本人の感性も随分と違います。にもかかわらず私は、ほかのどの歌よりもこの歌に「しびれる」のです。まあ大和魂の発露と申しましょうか、これぞ男の歌と武者震いします。

ところが本当の私はどうしようもない臆病者です。「ぶった切る」のが格好良いと感じつつも、実は予防注射一つ気持ちよく受けられません。また無類のひねくれ者でもあります。「頭右(かしらみぎ)」と号令されるとつい左を向いてしまう程です。会社員一つまともに出来ませんでした。極め付きの小市民で、実際に死を賭した革命などに誘わ

瞑想録(その18)

れたら真っ先に逃亡して保身することでしょう。そんな人間がどうしてこういう上意下達みたいな歌にしびれるのでしょうか。言行不一致の矛盾ですね。

ユダヤ人の心理学者でホロコーストから辛うじて逃れたエーリッヒ・フロムはその著書「自由からの逃走」で、「人は本来自由を求めるのにちょっとした擾乱をきっかけにせっかく得た自由を自ら捨てることがある」と分析しています。一種の対称性の自発的な破れです。私の場合もこれでしょうか。それがそうとも思えないのです。なぜなら私はこの歌にしびれた後も依然としてだれよりも束縛のない自由を希求していて、その心情は変わっていないからです。「縛られる喜び」など私に限ってありません。

一つ考えられるのは私がこの歌にしびれるときに、私は自分を兵隊と同一視していないで革命を起こした下士官の方に無意識に自己投影しているのではないかと言うことです。まあ自ら立ち上がって指示命令して世直しをするなら、それはそれなりに格好良いですね。それにしても格好の為に痛い思いなどしたくないですが。

この点について瞑想した結果思うことは、この歌が精神主義によって合理主義的な人間機械論や人の限界を打破して「向こう側に突き抜けている」と感じるのではないかと言うことです。私はメロドラマやスポーツをほとんど見ません。その理由は人の五体は手足それぞれ2本と頭で出来ていてそれ以上でなく、人の離散集合も同様に初めから嵌められている限界の中をコップの中の嵐よろしくごちゃごちゃ騒いでいるにすぎないと感じるからです。まあ一言で言うと、デジタル由来の閉塞感ですね。

それに対しこの歌はこの人類生まれながらの愚かな見えざる限界を突き抜けて、あたかも人が回り得ないその反対側から人の本質とその無限の可能性を歌い上げているように感じます。この歌が言葉と言うデジタルな道具を用いながらも、あたかも一幅の山水画のようにアナログな心象世界を歌い上げているように感じます。

山水画あるいは禅画は悟りを得て「突き抜けた」人が描くものですが、悟りのない我々にも感動を与えます。それは矛盾と言え矛盾ですが、心象において矛盾は何らの差しさわりもありません。つまり要約すれば私は弱虫でへそ曲がりな小さな人間であるからこそ、現実でなく悟りの世界での突き抜けという「超自由」に、一種の自己拡大を感じて感動するのだと思います。

比較として、戦後にできた「若い力」と言う文科省ご推薦のスポーツ賛歌の歌詞を載せます(MSワードのエラー回避のために一部カタカナ)。

瞑想録(その18)

若い力と感激に燃えヨ若人胸を張れ
歓喜あふれるユニホーム肩にひとひら花が散る
花も輝ケ希望に満ちて競エ青春強きもの

なにか人為的で安っぽいですね。きれいごとに過ぎていて、不潔さすら感じます。昭和維新の歌とある意味似たところを応援したいのかもしれませんが、お上から許容された範囲の内側で「まあ頑張りな」と言っているだけです。禅画でも大和魂でもありません。むしろ去勢された子向きの応援歌なのでしょう。田舎芝居もいい加減にしてほしいです。

繰り返しますが生の私は注射も手術も指示命令も上意下達も、ことごとく毛虫のごとくに嫌いなチキンでチンケな人間です。

19、意志の伝播と波動

これまでに何回か、人の理解の基本は「切れ切れで四則演算が入るデジタル」ではなくてもっと「柔軟でとらえどころが難しいアナログ」であるとして、脳の作用機序を瞑想してきた。

理系の研究者は脳の作用を科学したいと言うことで脳に流れる微弱な電流を計測するといったことに励んでいるが、従来の物理学の手法では脳の本質にはおよそ及ばないことは多くの人が感じていることと思う。従来の発想の延長では脳はおよそ蠅螂の斧である。

一方文系の研究者では特に心理学の方で何でも「連想と当てはめ」に帰着する傾向が強いが、脳の働きがこれほど単純ともおよそ思えない。実際に偉大な発見や美しい芸術はむしろ、知恵とか勘と言った「非連続的で前例のないこと」がきっかけとなっている。

本日はこの脳の働きである心象形成、あるいは言葉その他に依る意志の伝播について瞑想してみたい。意志の伝播がなければ他人同士のコミュニケーションなどできない。但し本日は人同士の意思疎通に限らず、景色の認識のように一般的な環境や外観のモチーフ認識と言う立場で考えてみる。

もちろん環境認識は目や耳や舌と言ったセンサーで獲得した情報の脳による加工解釈であるが、この解釈の内連想や当てはめと言った機械にでもできること以上の「ひ

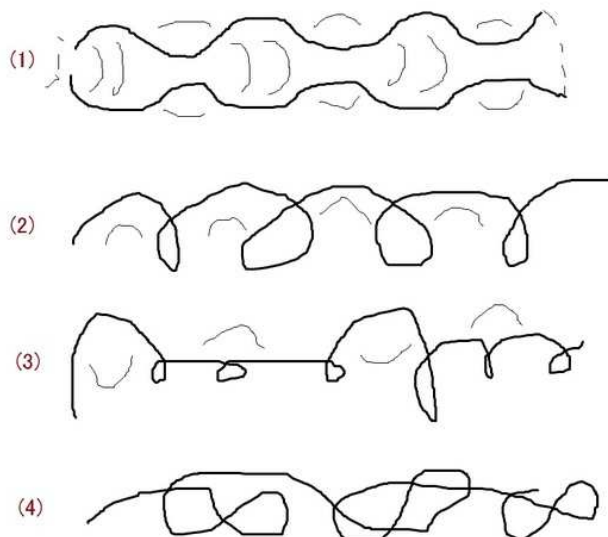
瞑想録(その18)

らめきとか勘」等を考えた時、そこには情報の発信元から受け手への「波動の伝播」があると思えることが多い。

例えば展覧会で絵の前に立ってしばらく見つめると、個々の部分でなく絵全体としてその作者が描きたかった世界が、およそ言葉にはならないが伝わってくる。そしてあたかも自分もその景色の前に立ったような、あるいは作者と旧知とも思えてその「脳波の交換」で絵の本質やモチーフを感得したかのような感触を受ける。しびれる音楽を聴いた時も「バイブレーション」と言うではないか。

この感触は絵が実は波動を発する発振器であって、我々が受信機となっているのではないかとの内観を得る。それはあたかもヨガの悟りのようだ。だから実際に空間を波動が伝播していると考えても、それは従来もヨガ行者が持っていた高度な世界観と異質ではない。

ただここで波動と言った時に注意を促したいことが2点ある。すなわち①波動の媒質としてのエーテルのようなものは存在する必要がないこと、②波動と言っても正弦波（サインカーブ）のような「整った」ものでないことの2点だ。①から特に注意したいのは我々の住む宇宙は3次元であるところ、この意志波動は3次元空間を伝播するというよりもっと自由な「意志空間」あるいは「脳空間」と言ったところを伝播しているという点だ。そして②については仮に紙と言う2次元に描くにしても、下図に例示するような多種多様の「アナログ波」がありうることだ。



瞑想録(その18)

そしてこれら多種多様の波は、波である以上は干渉や回折と言った波特有の性質をデジタル波よりもはるかに複雑な形で起こし、それが究極には「思いもよらぬ」知恵やひらめきや勘に繋がっているということだ。

デジタルの基礎であるところの「点」は「長さや面積のない最小単位」だからこれ以上もう深堀の余地はない。そしてその先に現代の数理科学がある。だが本質がアナログである波動は基本からして色々な態様があり得るのであり、しかも現状のデジタル数理科学の観点は「波も点に還元する」のを常道としているために、その態様は現状ほとんど理解されていない未開拓の分野である。

脳の作用機序と正面に向かうためにはまずこのデジタル信仰つまり「点の信仰」から解放されて、より広い視点に立たないと無理だろう。従来の常識は木に寄って魚を求めるようなものだからだ。加えて波動全般に対してより広い理解が深まるならば、波動力学と称せられる量子力学つまり従来物理にもその恩恵があることが考えられる。

現代の数学はその多産性から功利主義的に「点の素描」しか認めていないが、多産なことと本質的であることは全く別である。だから科学一般に言えることだがあえて外道な視点から物を見ることが重要だ。この「外道の道」は実は科学の祖と言われるコペルニクスやガリレオやニュートンもかつて教会の権威に逆らってやったことなのだが、今ここで最後の楽天地と言われる脳にまで迫る以上は科学の権威に逆らってもう1回発想の転換をする必要があるように思われる。

ただここで困るのはこういったアナログはあるいは一般にアナログについては、数字や四則演算のような便利な物がない、少なくともまだ見つかっていないことだ。数字や四則演算のように四方固めで固められていないからこそアナログはひらめきに至れるのだが、その同じ理由でアナログは言葉より緻密な記述言語を持っていない。この矛盾を乗り越える必要がある。文学にも用い得るような言葉による記述レベルでは、それらの相互干渉や回折現象など微妙すぎておよそ表現できないからだ。

今の時代は「科学的手続きに従えば免罪符」ということだけで物事を済まそうという、安直な雰囲気や「研究」が多すぎる。そのせいで人の知識体系もワンパターンの偏りを生じていることに、実は現代人の多くも気づいていない。だがこの気づきは未来の進化した人類を待たなくても、我々で十分にできるように思えるのだ。

20、現実と理論のかい離

今日は結論めいたことから話を始めたい、現実の判断や手続きとは一言で言うてどういうものか。現実の手続きとは、①本質的に不完全な答えを②不十分なヒントを基に判断することだ。これと対極に論理や学問的手続きは、十分なヒントを基に完全な答えを導出することである。

今あげた「2重の不」の意味で、論理や科学的手続きは非現実的である。現実的手続きは本質的にアナログであり、他方で論理や学問はデジタルで完ぺきなゆえにしばしば当たり前の答えしか出てこない。人生の荒波を乗り越えるにはアナログを追求し習得した方がよほど有意義で、しかも当たり前でない面白いウィットの利いた答えや方式が出てくる。この意味で教師や親の言いなりの「良い子」が、本当の人格者になるはずがない。

良く高僧とか悟った人が「答えは一つではない」とか「人生は一つではない」と言うが、これはことさらに精神の高い人に特有の言葉ではない。ふつうの特に明晰でもない人も言える当たり前の事実であるし、これが高い人の悟りの本質でも中核でも全くない。むしろ最近科学技術的手続きが異常に神聖化されて「答えは一つであるべきだ」とあまりに多くの人が思い込んでいるので、高い人もこんな当たり前のことから教えないといけないほどに世の中が偏っているということだ。

理屈の積み重ねがいかに不自然な答えに至るかは、庶民文化の典型である落語の「風が吹けば桶屋が儲かる」で十分に言いつくされている。だがここでは中世まで学問の中心であった神学に、その典型を見てみたい。具体的には宗教の中でも特に空論理の多い、キリスト神学である。

キリスト教の建前はイエスに習うことである。だがイエスは「神と同時に人」であるところ我々は人でしかないので、当然ながら神の部分については讃美することはあっても見習うことはできない。ここで例としてヨハネ伝におけるカナの奇跡を取り上げる。

カナの奇跡はイエスがとある結婚式で、宴会用の酒がないのを母マリアに頼まれた際に、奇跡によってカメの水をぶどう酒に変えた奇跡である。宴席の人々の前でやったわけではないが、彼らは「この家は良い酒を後に出す気の利いた家だ」と讃美したという。

さてここで問うが、奇跡をおこなったイエスは人としてのイエスかそれとも神としてのイエスだろうか。もし人としてのイエスの行いとするならば我々も同様の奇跡を起こさな

瞑想録(その18)

ければいけないがそれは不可能だ。これをできるというときにカルトが始まる。またもしそれが神としてのイエスの行為なら我々は「すごいね」と驚けば十分であって、何の人生訓もないことになる。どっちにしてもこの小話がなぜ聖書にあるのか、良く分からない。

素人信徒の勉強会なら「分からない」で良いかもしれないが、神学と言うもののおよそ解明不能とかあいまいとか適当と言うことがあってはならない。そういう要素があればそれはすでに学問ではなく、神学であることを放棄していることに当たるからだ。

そこで後世の神学者つまり無数の修道士たちは、論理的に完璧であろうとして色々と理屈をこねた。もっとも「神と同時に人」これは信条の重要な部分ではあるが、秘跡でもあるのでこれ以上分解できない。結局「もしカナのイエスが人ならどうなるか」とかまた「もし神ならどうなるか」等々を、色々な合理精神や根拠の引用によって場合分けして、決定論的に論理を積み重ね細かくて終わりのない議論をしていった。

その結果無数の優秀な頭脳によって万巻の解説書が書かれ、そしてそれ以降の聖職者はそれらの諸解説に通じることが聖職者としての必要条件になっていった。実際に優秀な人ならその大変な業務もこなせて、枢機卿とか博士とか言われて尊敬された。だがその彼らがその猛勉強のおかげでオリジナルなイエスに似て来たかと言えば、答えは返って遠ざかっている。

この神学のグロテスク加減は、現代の学問第一主義にも見られる共通な構造である。すべてを論証するという学問的手続きの根底には「本質は完全だ」という無言の前提がある。だがこんな調子の良いことがあると本気で信じているなら、あなたの将来は内ゲバを繰り返す過激派かハルマゲドンを引き起こすカルト宗教の信徒だ。

以前にも例を挙げたが、1, 1, 2, 3, 5, 8, 13……と言う数列を見よう。「 $5+8=13$ 」のように前の2つを加えたものが次の数字になっているという数列だ。これなら完璧なところこれをちょっと変えて、1, 1, 2, 3, 5, 9, 13……として見よう。たったこれだけで、論理や学問には解決の方法がなく全くの無力だ。ところが現実の複雑さ不完全さとは、多分に後者なのである。後者から前者を見抜く能力こそ知恵と勘だ。

ここで「そう言う不完全なものは相手にしない」それも一つの選択ではあろうが、これでは不当に自分を狭めていないだろうか。世の中は多分に予想通りでないからこそ面白いのだが、無視の選択は面白いことあるいは世の中のほとんどを自ら拒否して

いることに当たる。特に美術、中でも日本美術は対称性をあえて崩すことが美とされている。論理や学問にこだわることは、この幽玄な日本美をも拒否していることになる。

ではどうすれば良いのか。事物の本質を理屈による断片的点理解するのではなく、絵を見るように全体観でモチーフとして捉えることだ。当然に主観や相対論も入ってくるが、今の論理や学問優先社会は主観を否定的過ぎて人間味のないロボットのようにになっている。繰り返すが悟りに至るキーワードは、①不完全、②不十分、である。

21、最小仕事の原理

似た言葉に「最小作用の原理」という言葉があります。こちらは物理学の基本原則で、作用と呼ばれるエネルギーのようなものが最小になるように物理は出現するという原理です。光が屈折するのもその方が「作用」が最小だからです。これは「我々の外的世界も無駄なことはしていませんよ」という教訓とも取れます。

今日の題目である「最小仕事の原理」はこの物理の例えと同じく我々も、「頑張りは偉い」のではなくて「お互い最低限の仕事でスマートに暮らしましょう」という呼びかけです。このことは直ちに「さぼれ」とか「手を抜け」と言うことを意味するものではありません。もしそうならこれは「無仕事の原理」とでも呼ぶべきでしょう。最小仕事の原理は「最低限の仕事はきっちりとする」という前向きの意味も含んでいます。

世の中は愚かな頑張りへの讃美や自己利益のためのパフォーマンス等により、無駄な仕事が多いように思います。もちろん仕事なしでは収入も得られないですし、お金を出さないと最低限の衣食住も買えません。また世の中が巨大化し複雑化した現在はどうしても分業にならざるを得ず、その分水平及び垂直な組織化が起きています。組織化はどうしても画一化を伴い画一化に無駄はつきものですから、無駄を全く省くというのは理想論になってしまいます。

それにしても「黙々と無心に自分の担当をこなすことが偉い」、この言葉の愚かさは何でしょう。もしかしたら古代ギリシャのストア哲学のずれた影響かもしれませんし、キリスト教の形式主義が世界標準になっているせいかもしれません。日本も明治維新後の欧化の時期ではありますが、二宮金次郎的な勤勉さが変に奨励されました。時代背景もあるのですが、人はもう少しスマートになれるのではないかと感じます。

知恵をもっと、無駄仕事の省略に使うのです。客より店員や仲居の多いデパートや旅館が良くありますが、おかしいと思いませんか。今あちこちで問題になっているゴミ屋

瞑想録(その18)

敷、そのごみだって元は製品でその製品一つ一つに生産・検品・運送工程と言う仕事が入っています。それがまとめてごみと言う無価値物に化しています。

逆説のようですが無駄仕事を省く第一の知恵は、先手を打って仕事をしておくことです。放っておくと将来何倍にも手間が増えて收拾がつかなくなるような問題、例えば面倒な知り合いとか雪だるま式に増える借金とか、そう言うものはできるだけかわらないか事前に切り捨てておきましょう。こういった先を見通す知恵により、将来のトータルとしての仕事はかなり減らせます。これが知恵の最も賢い利用法です。

こうして無駄仕事を省いた結果創出される時間や労力は、どう使うのが一番賢いでしょう。これで別の仕事をしては、元の木阿弥で最大級に愚かです。駆け抜けや不平等もなく世界一斉に用意ドンで週休3日にすれば、世界中の人々に余裕ができます。現状のようにうつ病になるほど焦って技術革新をしなくても良い程、世界はもう十分に進歩しました。サービスの向上に競争は必要でしょうが、競争の必要性ばかりが喧伝されすぎです。人は何のために生まれてきたのでしょうか、ラットレースで死ぬためでしょうか。

私自体はエピクロス派なので、自分は「自由に基づく精神的喜び」を得るために生まれてきたと信じていますし現に日々実践しています。世の中に誤解があるのですが、エピクロシャンとは放蕩の快樂に沈むものではありません。エピクロス自体は肉体の快樂をむしろ苦に分類していました。エピクロスの哲学は直接には、ストア哲学のアンチテーゼです。楽しい事だけをかいつまんですればよい、それがエピクロスの理想です。

もちろん友達付き合いが好きで「365日みんなで鍋をつついていれば楽しい」という人はそれをすれば良いと思いますが、私は面倒な人間関係にとらわれずに静かに瞑想したい人なので、私の理想は隠遁者です。隠遁者と言うと山奥の洞穴に一人籠るイメージがありますが、これはこれで現代の利便性を拒否していて現実的ではありません。私は現在嫁様と都会のマンション暮らしですが、幸い隣近所に面倒な人も居ないのでほとんど隠遁者のようなものです。これが田舎だったら面倒な近所づきあいとか寄り合いとかがあるのでしょうが都会のマンション、これが意外な穴場です。

最近スイスやアイスランドでベーシックインカム制度がともに議論されています。これに対する日本人識者の評価記事も最近読みましたが、「ベーシックインカム制度は労働意欲を喚起できるか」と言う観点からしか議論されていなくてがっかりしました。どうしてすべてが労働意欲向上や生産性向上の観点から評価されないといけないの

でしょう。もはや末世です。「生産性を落としても一人一人の内面を充実する」、そう言う発想ができないこと自体がもはや病も重篤で手の施しようがないかの感を禁じえません。

八代亜紀の「舟歌」の替え歌ではないですが、「♪仕事は少ない方が良い、時々息抜きできりゃ良い、小さな幸せ望みつつ、歌いだすのさ～安楽を」、こういう余裕が罪悪でない世界に早くなって欲しいものです。

22、気づきは脳波動の干渉効果

以前の「アイデアの出し方」と題した記事で、気づきは非論理的で脈絡なく突然言わくものほど優れていると論じました。また「意志の伝播と波動」と題した記事で、意志の伝播や状況把握の基本はアナログな各種の波動であると論じました。

数学や文様に関する構造の気づきのポイントは、繰り返しや対称性や規則性です。また物作りに重要な動機のポイントは、役立つものを作るその具体的な構造の理論や指導原理に沿った気づきでした。そしてこれらの構造が見いだせる理由はその構造が完全、少なくとも理論的には完全だからです。

ところでやはり以前に「現実と理論のかい離」の記事で指摘しましたが、現実の日々の判断はこれらの数学や工学と異なって、理論面では不完全な事物について不十分なヒントを基に決断することでした。ですから解は一意でもなければ、絶対真な解が存在するわけでもありませんでした。繰り返しや指導原理も存在しません。それはむしろ、一幅の絵を鑑賞する行為に近いでしょう。

これらの議論を基に総合しますと、日々現実の判断と選択は環境や対象を「波動でそのモチーフを感得して脳内処理する」ことにあると言えるでしょう。絵も環境も大抵の場合繰り返しや規則構造はないのでデジタルな論理理解は不可能ですが、その環境や対象が多様なアナログ波ならばこれを授受し感得することができるわけです。

言い換えれば数学やモノづくりあるいは学問一般は規則性のあるものにだけ適用できる手続きであって、万能どころか適用できる事物の方がむしろ例外的でかつ隅の方にあることが分かります。学問は思考訓練を除いて、日々の常識判断にはおよそ使用できません。一種の下等なワンパターンです。現実を理論の枠に無理してはめ込んでも、醜くなるだけです。

瞑想録(その18)

私は若い学生のころから、世の中が「数学やモノづくりのようなつまらないものしかない」などと言うことは決してあり得ないと確信して、その世の中の中心にある「もっと面白いもの」を探してきました。そしてその面白いものは大学以外の場所に遍在していてむしろ日常茶飯事の方が参考になるほどだが、それでもその濃度は極めて薄いのでなかなか掬えないと気づいていました。そして最近になって、その答えはアナログ波動であると分かったわけです。

ところで波動であるならば、それらは形がどうであれ互いに干渉したりあるいは回折したり、あるいはうなりやモアレのような予期しない非線形な表出の仕方をするはずで、この予期しえない表出こそが意外な気づき、つまり構成する波動面の内側でなく外側の意外なところにピンと突然ひらめく原理です。

ですから波動論からも新アイデアのためには、理屈を忘れて素の頭脳に委ねるべきです。力むとアイデアの波動が収縮してしまっ、干渉効果が消滅してしまいます。論理や言葉にすると波動が縮退してしまっ、波ではなくなってしまう。

美術展等で絵画を鑑賞するときに個々の絵の前に立って素心で10秒ほど眺めると、その絵心を言葉や論理にはならないものの感得できます。集中はしますがさほどの時間はかかりません。現に我々が動画を見ているときに、数十秒ごとに場面ががらりと変わりますが理解に時間がかかって話についていけないことはほとんどありません。絵のモチーフを理解するには数秒で十分です。

但し頭を絵に集中させる必要はあります。これは①絵や環境の発する波動を混ぜ物なく純粹に捕捉する必要があることと、②絵と言うアナログを理解するのに何億個と存在する脳内のシナプスとニューロンをその一瞬だけ全部使う必要があるからです。デジタル計算機は最近の発達によって並列処理が標準になっていますが、デジタル演算と異なってアナログ波動理解には実は並列できないほどの大規模処理が必要なのです。考え事をしているときは話しかけられても上の空になるのも、同様の原理です。

この「一瞬だけでも集中が要る」、これは根っこのところで本能とも直結しています。例えば動物が黄色の中に黒い縞が入った模様を見たとします。この時その動物は先ずとっさに逃げて距離を取ってから、その後にそれが虎のような危険物でないかを時間を取って細部確認するでしょう。環境や絵画理解も同じ種類の能力が働いています。

この環境や絵画理解でもう一点重要なことを指摘します。我々はその対象について、①色具合や勢いと言った抽象的な要素と、②連想や当てはめによる物理解(例えば「これは人の顔だ」と言う全く別の理解の仕方を同時に処理しています。ここで前者はアナログで後者はデジタルです。この意味での並行性のおかげで我々はその絵から、「人の顔を切り取っただけで残りは不認識と言うことがありません。その意味でデジアナ極めてバランス良くできています。この根っこも本能にあります。

こうして1つの対象を理解し納得すると、そのおかげで視界が広がってきます、それは①未理解と言う邪魔者が整理されて見通しが良くなったこと、②新理解が次の理解のための新たな橋頭保になってくれること、の二重の効果に依ります。では目的論的に、どうすれば脳理解の波動をうまく干渉させられるでしょうか。これが分かればアイデア創出の効率も良くなるのですが、この点についてはまだ瞑想中です。

23、巷に見る気づき

先日は気づきと言う心象行為を、多種多様なアナログ脳波動の相互干渉効果であると説明したが、本日は気づきの実際を巷のニュースから典型的に見てみる。

気づきをするにはその気づきのレベルにも依るが相応の瞑想や内省や努力が必要であって、決して安直ではない。であるにもかかわらず巷には新製品や新作品や新刊本や諸々のニュース等気づきにあふれているので、以下に典型的に上げる例はそのほんの一部でしかない。ほぼ上策から下策の順に並べてある。

<突発ひらめき型>

「猫を駅長にする」、これはおよそ連関のない突拍子もないアイデアだったが、結果的には大当たりした。これは気づきの究極である。一見ばかげていることが意外と当たるのだ。ただこういう無謀な気づきは他人に言葉で説明できないので、下からのボトムアップ提案方式だと採用されにくい。この件も思いついた人が経営者だったために、号令一つで実行に移せた。同じ零細私鉄でも「ぬれ煎餅」よりもさらに成果を上げたのは、生き物を用いたせいだろう。またこの手のアイデアはダメだったら辞めればよいだけで、リスクは少ない。

<タブー乗り越え型>

ビール業界ではそれまで「味を変える」ことはタブーとされてきたが、あえて味を変えるという「暴挙」に出たアサヒビールは「スーパードライ」が大ヒットした。後なしの崖淵だったからこそ生きた知恵だ。その意味で危機は時にはチャンスにもなる。もちろん当

瞑想録(その18)

たらないと倒産で、世の中の評価は多分に成功報酬主義なので、この事例の影に死骸累々だろうが。

<マニア型>

やはり零細私鉄と言うことで、いすみ鉄道の「ムーミン列車」を挙げる。思いついたのは生まれながらの鉄道マニアで、夢と生きがいを追ってあえて安定した仕事を捨てて安給料の社長業に応募した鳥塚さんだ。このプロジェクトは鉄道マニアの間で予定通りの成果を上げたが、あくまでも予定通りであってタマ駅長ほどの大化けはしなかった。この辺が好きを理由にビジネスをする人の、「枠の外に出られない」限界かもしれない。

<偶然発生型>

今やアニメやゲームと言うと擬人化だが、このアイデアは最初からヒットを狙ったものでない。漫画好きな人がたまたま自分の為に趣味の延長でやったら、大化けして大潮流になったものだ。始めた人は業界では神格化されただろうが、このアイデアで直接に儲けてはいないだろう。これも文化の現れ方の一類型だ。

<ニーズ遡り型>

ミクシーはSNSでスタートしたが数年で飽きられ、倒産寸前のところをスマホゲームのモンスト(モンスターストライク)で奇跡の回復をした。SNSとスマホゲームと言うと同じソフト系とは言いながら分野はまるで違う。ただこれはタマ駅長のように突然のひらめきではなく、それまでのデュエマとかオレカと言ったゲーム流行から、ニーズのヒントを得たものであろう。マーケットインと言う意味では評価する。ソフト業界はまだまだ新大陸のようである。似た例にメルマガ配信業だったGMOが今はFXを中心とした証券メーカーであり、そもそもニンテンドーも元は花札屋だった。

<もうひと押し型>

音楽作成ソフトの初音ミク、アイデアの始まりは電車やバス等の音声サービス技術のニーズ拡張を狙ったもので、これ自体は良い気付きであったが今一流行に乗れなかった。そこで「これでだめならあきらめる」と、萌えキャラをデザインして音と画像を組み合わせたら大ヒットに至った。このもうひと押しを裁可した経営者は評価されるべきだろう。

<無理押し型>

永田洋子ら革命運動家あるいはオウム信者らの反社会的行動は、非合法かつ不毛で到底受け入れられるものではなく、当然に警察によって追い詰められていった。だ

瞑想録(その18)

がその限定された環境下における彼らの行動力とアイデア力には、やり手の商社マンも顔負けの目を見張るところがある。土地勘のないところにアジトを作ったり、関係のなかった国から武器を密輸入したりとか、素人集団が「ここまでやれるのか」程の活躍をしている。追い詰められると結構できてしまう好例である。

<もがくだけ型>

業績が下がりっぱなしのマクドナルドや、業態を変えても客が来ない大塚家具など、決してさぼっているわけではないだろう。だが「構造的にドツボにはまっている」感じで、仮に私が社長になってもおよそアイデアが浮かばない。ピンチをチャンスに変える前例となってハーバードビジネススクールの教材になって欲しいのだが、現物業界はもはやソフト業界のような「夢の新大陸」ではない。地方のデパートや電機業界の三洋やシャープも役割が終えたと言うことで、もがいても結局は無駄筋だったのだろう。

<儲け優先型>

外資のアップルコンピュータの社長として目覚ましい成果を上げて「プロの経営者」と持ち上げられた原田泳幸さん。その後マクドナルドでは今一で、さらに教育産業のベネッセに移ったがそこで出したアイデアは電子教材。こんなのはおよそ素人でも思いつくアイデアだ。しかも「儲けありき」の値段設定としたために割高によりまるで鳴かず飛ばずで、結局「疫病神」と呼ばれて引責辞任した。まあこの辺がこの人の、本当の実力だったのではないか。

<消去法型>

半導体産業が「中韓台に売り負ける」という構造上の限界回避のために、日本の主要重電メーカーはドンガラ物回帰をして、そのドンガラに半導体を埋め込んでセット売りするという方向にかじを切った。これ自体は正解だったが、東芝は電車も船も飛行機も自動車も作っていないでドンガラ物は発電機だけだったので、消去法的に原子力にかじを切った。これは素人の私から見ても明白な自殺行為だった。今時原子力など、タダでも買うバカはいない。

<不作為消滅型>

崖淵でも勝負できない老舗、酒蔵とか和菓子屋とか和服屋とか、どんどんつぶれている。地方の酒蔵等も、商事会社化するか他の酒蔵の下請けになるかの二者択一か、さもないと廃業するかしかない。残念ながらもはや「先代と同じ」ができる時代ではない。

24、「オウム事件17年目の告白」を読んだ

オウム真理教に依るサリン散布無差別大量殺人事件から、間もなく22年がたつ。その年はその少し前に阪神淡路大震災もあり、「本当の世紀末か」と騒がれたものである。本日の本は当時のオウムの最高弟子で表の顔でもあった上祐史浩(じょうゆうふみひろ)の、マインドコントロールから脱して教団と自分を客観視できるようになってからの、反省と解明を述べたものである。

当時オウムの教祖麻原に次ぐ最高弟子は上祐と村井で、一言で言えば上祐が表の顔で村井が裏の顔だった。しかもその当時上祐はロシアに派遣されていたので、サリン事件の詳細まで知っていたわけではない。そして肝心の村井は事件直後に殺害されてしまった。だからサリン事件についての詳細は依然として闇の中であるが、この本はどういう種類の人がどういう思考回路で麻原に帰依して指示のままに反社会的行為に走るほどになったかと言うカルト問題について、かなりのことを明かしてくれている。

上祐が麻原に興味を持ったのは子供のころから超常現象に興味があったこと、そして大学の学問ではその興味が満たされなかったことにある。父親が愛人を作って家出したと言う家庭内の問題もあった。この2つの理由により麻原に帰依していた時の上祐は、麻原を尊師であるとともに父代わりであり絶対帰依の対象と位置づけていた。

そして上祐が明かす麻原にも、それに負けない不幸な生い立ちがあった。頭は良かったが弱視に生まれ、家庭の貧乏もあって本人の意に反して盲学校に入れられた。そして盲学校では他の生徒よりは見えるために優位に立ち、自分の意思を貫徹して自分の王国を作る方法を自ら見出した。熊本生まれの彼は、自分が弱視なのは水俣病と言う社会悪のせいだとも信じていたという。

また生まれつき靈感が強く、未来予知や透視など凡人よりもできたという。弱視ゆえに第六感が伸びた面もあるかもしれない。それが本人の「自分は別格」の根拠になっていたのに、盲学校入学と言う屈辱を受けた。そして「社会は全部敵だ」との被害妄想に至った。この手の人は被害妄想とともに誇大妄想もいわば表と裏の一体物として持っているものであり、彼はそれらの解消手段として教祖になって自己実現することに見出した。

麻原は世界の主要宗教を学んで「自分はやはり特別な才能と使命を持っている」と確信した。特に仏教とバラモン教を中心とした自分の教義を構成していったが、それは多分に宗教混合であって総合化がなされていなかった。そのために多分に自己本位

瞑想録(その18)

の良いところ取りに出来上がっていたが多少の奇跡は起こせたために、弟子たちはそれに幻惑され矛盾から目を背けて麻原に盲従していった。

麻原が特に注目した教義は、チベット仏教のヴァジュラヤーナ(金剛乗)である。金剛乗とは小乗仏教(長老派)はおろか、日本の仏教である大乘仏教も超越した最高の教えであるとされている。金剛とはダイヤモンドのことであり、金剛乗は世界一硬くて完全な教えなのである。そしてその教えには「良いことのためなら人を殺しても良い」とか「盗みも悪ではない」と言った教えが含まれている。「殺すな・盗むな」が時には最高知獲得の妨げになるという解釈だ。

大乘仏教にも「嘘も方便」と言った一見反社会的な教えの部分があるが、これがグーンと大きくなったようなものだ。これはつまるところこういう教えをまともに扱える人格者にしか伝えてはいけない一子相伝の教えであるのだが、何でも情報化のこの時代におよそ不適格な麻原に悪用されてしまった形である。

こうして理論的正当性を得た麻原は社会一般に対する仕返しに燃えて、いわば自己実現の一環として現存社会の転覆を狙ったわけである。社会と自分は背反で相いれず、かつ自分たち一団は正しく社会が悪い。加えて歴史にはあたかもマルクスの予言のように、「ハルマゲドンの科学的予言」がある。ならばそれを実行して世界を救う大義は、自分の側にあるというわけだ。上祐は麻原に似た人物として、ドイツ復興と称してユダヤ人を虐殺したヒトラーを挙げている。

果たして麻原はこれらの教義を自分でも信じていたのか、あるいは弟子たちを操る単なる方便として用いたのか。前者なら間違いで後者ならペテン師だ。この点についての上祐の見解は、「そう言っているうちに自分でも信じてしまった」と言うものだ。この手の誇大妄想狂にありがちな論理回路である。

つまり麻原は社会から不当な待遇を受けた時点で激しい怒りに燃え、その激しさゆえにその時点から精神的に成長していない、いわば「大人子供」だったというわけだ。この辺は山岳リンチ事件の永田洋子にも通じるものがある。そもそも本当に頭が良くて透視もできるのなら、自分の固意地を一旦譲ったほうが展望を開けることにどうして気づけなかったのだろうか。

他方で弟子になってマインドコントロールを受けた側の特徴も、①超能力を獲得したい、②自分が特別視されたい、③凡人の常識は俺様には関係ない、と言った心象上

瞑想録(その18)

の特徴を持つ。弟子には理工系の優等生が多かった。理工学を極めれば極めるほど、世の中には学問では解決できない「超えた事実」があるという気にしばしばなる。

そして麻原と多少なりとも同様な社会不満を持った人々には、麻原の説く世直し教義がばら色に映ったのだ。四季自然よりも論理を優先する人が陥りやすい落とし穴であり、時代が異なればおそらく共産主義革命に身を投じていたことだろう。

こと育ちの境遇の不幸さについて言えば、そう言った人が全員反社会的になるわけではない。そこには麻原特有の意地の固さや超能力の過大視と言った優越要因を指摘できる。イエスの方舟事件の家出娘たちに見えるように自己本位で抑圧的な両親がいるほうが片親よりもよほど迷惑なのだが、麻原はこれにも気づけなかった。

さらに「人民をポア(殺す)の上輪廻転生させてより良い来世に送ってやることは愛であり正義である」と説くあたりは、学生運動の山岳ベースリンチ殺人事件における「肉体的苦痛を通してより高い革命戦士にもって行ってやることこそが愛である」と言う論理と全く変わらない。このように閉じた世界で理屈が自己本位化して、ポジとネガが入れ替わることもカルトの特徴である。誰もが人生の解を求めているが、このようなカルトに解を見出してしまった人は不幸である。

この本では最後に、江川紹子さんと親しい評論家との対談を載せている。その評論家は「上祐の一定の改心は認めるもののこれから油断はしない」と言い、その理由として「多くの人々が上祐の改心は偽装で実はオウムの特動隊だと信じていること」を理由に挙げている。

私の読後感として上祐は90%解毒できていると思う。一度間違いにはまった人の毒が100%取れることはあり得ないので、90%は実質上の最高値でこれは永田洋子の場合も同様だ。ただ私がこの手の人物の改心について恐れるのは先の評論家と理由が少し違っている。現在の上祐は十分に反省しているものの、これからの長い人生においてまた揺り戻しがないとは限らない、カルトはそれほど根深いからである。

17. 02. 23